



第41号

〒105-0001 東京都港区  
虎ノ門3-6-8 第6森ビル  
財団法人 特攻隊戦没者  
慰霊平和祈念協会  
電話 03(3432)1090

編集人 田中賢一  
発行人 木村元正

目次

世田谷特攻観音年次法要	1	真の宗教人	20
八月十五日の靖国神社	2	高千穂降下部隊のレイテ作戦	21
靖国神社みたま祭の懸雪洞	4	福山正通少佐の出撃(続)	26
忘れがたい人たち 回天③	7	第一御楯隊・彩雲一〇一会	
遺書遺詠にみる靖国神社	8	慰霊祭	28
回天秘話	13	映画上映会の御案内	28
		図書紹介四件	28

## 世田谷特攻観音 年次法要

9月23日

この法要を行うのは観音寺であって、それを特攻観音奉賛会が支援して行っている。奉賛会の実体は特攻慰霊協会である。本年も例年通りの内容で行われた。祭文奏上は瀬島会長、追悼文は遺族代表として誠119隊の森興彦少尉(特操2)の従弟岡本昌三殿が、戦友代表として伏竜隊の海老沢善佐雄が奏上した。参加者は遺族・来賓・会員合計で約390名だった。

### 由来

陸海軍特別攻撃隊烈士の英魂を大慈の観音像に顕現し、その忠烈を顕彰しようとする海軍大将及川古志郎、同高橋三吉、陸軍大将河辺正三、陸軍中将菅原道大、海軍中将寺岡謹平等が発起人となり、有志の方々に喜捨を仰ぎ、昭和27年春平和観音像を建立した。同年5月5日音羽の護国寺において、開眼供養が盛大に行われ、特攻平和観音と称することになった。

この観音像は大和法隆寺の夢殿に奉安してある秘仏「夢ちがい観音像」を特別の許可を得て模造したものであり、一尺八寸の金銅像で、胎内に特攻烈士の英名を謹書した巻物を奉蔵してある。特攻平和観音は護国寺境内の忠霊堂内に安置されていたが、世話していた白蓮社の解散に伴い特攻平和観音を守りする者が無くなってしまった。有志の人達が寛永寺その他の寺に交渉したが、なかなか受け入れられなかった。

ところが、この話を伝え聞いた世田谷観音寺の開祖太田睦賢大僧正は、特攻観音独自の堂宇建立の悲願を立て、元華頂宮家の持念仏堂を境内に移築することになったが、その完成を見ずに昭和30年5月24日に遷化された。その後を継がれた御子息の賢照師が先代の意を体し観音堂を完成、31年5月18日に落慶法要を挙げて、特攻平和観音を遷座された。

最初の特攻平和観音は、陸海軍航空特攻の烈士のみを顕彰するものとされていたがその後舟艇関係の特攻烈士を追加合祀し、現在四千六百有余名の英名が観音像の胎内に奉蔵されている。境内の池の中にある観音像は、特攻観音と同形のもので、昭和48年9月23日に開眼法要が営まれたものである。

### 特攻平和観音奉賛会

奉賛会は昭和28年に有志により組織され、31年に拡大されて遺族と有志が

一体の組織となった。更に57年に再組織され、当時の特攻慰霊顕彰会会長竹田恒徳様を会長に頂き、事務所は世田谷観音寺内に置いた。その後竹田恒徳様御逝去に伴い、瀬島現会長が引継がれた。

毎月18日午後2時より月例法要を取り行い、有志の者が賢照師と共に読経供養しており、また毎年9月23日秋分の日、午後2時より年次法要を挙行し、浅草寺一山式衆のもと多数の遺族戦友も参加し厳修されている。



# 八月十五日の靖国神社

## 英霊にこたえる会主催者の第24回全国戦没者慰霊大祭

本年も参列者は拝殿一杯になった。

堀江会長の捧げた祭文の要所は、

先帝陛下は昭和六十一年八月十五日に

この年のこの日にもまた靖国の

み社（みや）のことに うれひはふかし

とお詠みになりましたが、その大御心を

を拝察する時、国民の一人として真に

申訳なく恐懼に堪えません。

また今上陛下、皇后陛下におかせら

れては、平成六年激戦の地硫黄島に行

幸啓され、

精魂を込め戦ひし人未だ

地下に眠りて島は悲しき

慰霊地は今安らかに水をたたふ

如何ばかり君ら水を欲りけむ

と御製 御歌をお詠みになられ、戦没

御英霊に深い大御心をお寄せになられ

ましたが、翌七年終戦五十年には、沖

縄始め各地に慰霊の旅を続けられ、さ

らに、靖国神社と全国の護国神社に御

幣帛料を御下賜になる等、その大御心

の程、誠に有難く、かつ、無量の感慨

を覚えずにはおられないのであります。



誠に恐れ多いことではありますが、先帝陛下の昭和五十年十一月二十一日が最後であり、今上陛下におかせられては、本年は御即位十年になります。御即位後の御親拝を賜ることなく、遂に今日に至っております。

いうまでもなくこれは、三木総理の私的参拝をめぐるその後の動向と、昭和六十年八月十五日の中曽根総理参拝後における、我が国政府の中国の干渉に屈している政治姿勢によるものであります。

陛下に対し、また、二百五十万御英霊に対し、誠に申し訳ない限りで言うべき言葉もありません。(以下略)

英霊にこたえる会  
日本 会 議 共 催

### 第13回戦没者追悼中央国民集会

本年も参道に作られた大天幕の中で行われた。椅子は700席であるが、回りに立っている人も含めば、延千五百から二千人に及ぶ人が参加した。

五十四年前の本日拝聴した終戦の詔勅の玉音放送の録音を拝聴し、主催者挨拶に続いて、各界代表次の三名の提言があった。

富士通名誉会長 山本卓真



日本作詞家協会会長 星野哲郎  
参議院議員 矢野哲朗  
終って正午に合せて黙禱、ついで武道館における式典の天皇陛下のお言葉を拝聴した。

そのあと、声明文の朗読があった。声明文の中で特に大事な箇所は、「しかるに、本年もまた中国の不当な干渉に屈して首相の靖国神社参拝は中止された。加えて、新聞報道によれば、政府・自民党首脳は、首相の参拝を行うための環境整備の条件として旧敵国のいわゆる「A級戦犯」の分祀と靖国

神社の非宗教的特殊法人化を検討すると、公言している。

これは靖国神社の歴史と伝統を冒瀆し、その存在自体を危殆に瀕せしめる暴挙である。そもそも「A級戦犯」とは旧敵国の用いた呼称であって、わが国は昭和二十八年国会の全会一致を以て、この人々を含む昭和殉難者の全てを「犯罪人」とは見做さない旨の決議をしている。現在に及んで、なおもこれら殉難者達を「戦犯」呼ばわりすることは、それだけで東京裁判史観への完全な屈服を意味し、またいわゆる「歴史認識」の争いに於いて自ら進んで敗北宣言をするに等しい。日本国民として到底容認できることではない。

また、靖国神社の非宗教的特殊法人化とは、畏くも明治天皇の思召に基づく神社御創立以来のわが国固有の信仰伝統を否定する行為であり、現行憲法の信教の自由保障の原則に照らしても重大な誤りがある。政府は今直ちにかかる姑息な策謀を全て断念し、ただ一意専心、現状のままでの首相の公式参拝の敢行を決断すべきである。」

### 参拝者の群

本日の参拝者は地方から上京した遺族会の団体もあるが、大半は首都圏の在住者とお見受けする。若い人も多いのによく来て下さると敬意を表する。拜殿の前でお賽銭を投げ、二礼二拍手一礼の作法で拜んでいる。かつてその作法さへ弁へなかった首相がいた。もつとも、その人は中国から叱られて、その次から参拝をやめてしまった。



午後のサイレンが鳴ると、人の群は一斉に止って黙祷を捧げる。道徳の頽廃した現在、まだまだ健全な庶民は少くない。御祭神の遺書を書いた掲示板をジッと見つめ、更に彩管奉仕会の人



達が表示した油絵に見入って、やがて退去するときは、大鳥居のところで廻れ右をして、もう一度拝礼して九段坂を下ってゆく。この気持ちに日本の総理大臣は、なれないのか。

翌日の夕刊に、政府主催の追悼式での小淵首相の式辞が載っていた。

「あの戦はわが国のみならず多くの国々、とりわけアジアの近隣諸国に対しても多くの苦しみと悲しみを与えました。だから反省しているという。これが国を護る為に一命を棄てた英霊に対して言う言葉か、そんな量見だから靖国神社に参拝できないのだ。靖国の神前で拍手を打っている庶民の爪の垢でも煎じて飲んだらどうか、と言いだくなる。」





靖国神社みたま祭の

懸雪洞にみる御祭神の遺詠

7月13日から16日の間行われた靖国

神社みたま祭には、今年も多数の懸雪洞(ぼんぼり)が奉納されていた。その中で心引かれるのは御祭神の遺詠を掲げたものである。

一、特攻隊員の遺詠

野畔の草召出されて桜哉

第二七振武隊 原田 葉

奉納者 金 文男

海に向う

原田少尉と27振武隊のことについては前号で述べたので、重ねては述べないが、原田少尉には次の詩が、今度我が協会で発行した遺詠集に出ている。

蹶然去郷赴国難 一飛踏破千百里  
胸中無生死亦無 疾風迅雷碎敵母

原田葉少尉 熊本  
県出身 26才 早稲  
田大学 特操1期  
20年6月20日都城東  
飛行場発進 沖繩近



石川中尉遺詠

思はじと思えどとかく思い出づ

故郷の母よさやけくおはせ

回天金剛隊 石川 誠三

奉納者 長沢 政輝

石川誠三中尉 茨城県出身 22才  
海兵72期 伊58潜(艦長橋本以行少佐)  
に搭乘 19年12月30日大津島出港  
1月12日朝グアム島アブラ港に対し回  
天発進、港内に突入して目的を達成し



たものと判断された。

石川中尉には多くの短歌が残されている。(全国回天会小灘会長提供) 第一首は雪洞に書かれたものと少々違いますが、詮索は措く。

石川誠三遺詠

思はじと思えどとかく思い出づ

故郷の母よ 健やかにおわしませ

いかならむ事はあれども母親は

戦う子等の 希望のともゆら

母上よ消しゴム買うよ二銭給へと

貧をしのぎし あの日懐かし

昼光燈に照らされなはず千鳥さえ

故国を偲ぶよすがなりけり

明日の日は戦い死なむ今日の日は



伊58艦上で訓示を受ける金剛隊 前列向かって左石川中尉

静かに故国の 春を偲ばん

降る雪やつきぬ涙に曇りつつ

故郷の山を思いける頃

己が身は如何に果つとも悔いはず

心にかかる 国の行く末

君が為潔く正しく若桜

いま国こそぞ 神風に散れ

待ちに待ちし我が腕見せむ秋ぞ来ぬ

おぞの亜米利加 心して知れ

日の本のますらを人と生まれ来て

今日大業を なすぞ嬉しき

月堂の光恵ましわだつみを

大いなる死に 吾は近づく

たとえ身は血肉の玉と碎け散るも

護らで止まじ すめらみくにを



(昭和十九年師走 遺詠)  
 天てらす神のみ末の弥栄を  
 拝みまつり 花は散りゆく  
 (発進四時間前に記した文の最後の言  
 葉)  
 いざ征かむ人界の俗塵を振り払い  
 悠久に輝く 大義の天地へ

二、昭和殉難者

山下大将遺詠

今日も亦 大地踏みしめ還り行く  
 わがつはものゝ姿たのもし

奉納者 古井 貞方



山下大将は第14方面軍司令官、マニ  
 ラに於ける報復裁判で21年2月23日刑  
 死  
 同大将にはこれ以外に次の遺詠があ  
 る。

待てしばしいさを残して逝し友  
 あとな慕ひて 我も逝きなむ  
 満ちかけて晴れと曇りに変われども  
 永久に牙え澄む 大空の月

東京裁判A級戦犯烈士辞世の歌

土肥原賢二

踏み出せば狭きも広く変わるなり  
 二河白道もかくやあらなん  
 松井 石根

天地も人もうらみず一すじに  
 無畏を念じて 安らげく逝く  
 板垣 征四郎

さすらいの身の浮雲も散り果てて  
 眞如の月を 仰ぐうれしさ  
 東條 英機

今ははや心にかかる雲もなし  
 心豊かに 西へぞ急ぐ  
 奉納者 加藤 英雄



山下大将は彼等のいうB級戦犯、も  
 う一つの雪洞に載っている人達はA級  
 戦犯という。勿論全部御祭神である。  
 これについて憤慨に堪えないのは、昭  
 和60年8月15日に時の中曽根首相が参  
 拝したら、戦犯を合祀してある靖国神  
 社に参拝したとて中国に文句をつけら  
 れ、翌年からやめてしまった。その後  
 の橋本首相は日をづらしたり恐る恐る  
 参拝したら、また中国から叱られた。  
 その後は日中友好を害するとて、首相  
 の参拝は行われていない。  
 中国の古来の中華思想が脈々と伝わっ  
 ている。自らを尊しとなし周囲の異民  
 族を卑下する風習が、今もって滲みつ  
 いている。東夷西戎南蛮北狄の一部で  
 ある日本が、かつて自国を制覇し、今  
 は経済的に優位に立っている。堪え難  
 い思いがするのであろう。それに一党  
 独裁で野党がない。国民の不满による  
 政権の交代ということがあり得ない。  
 不平不満が昂ずれば暴動以外に吐け口  
 がない。従って対外的に強硬に出ること  
 とは、国民の不平不満を逸らす手段と  
 して使われる。日本の首相を叱りつけ  
 ることなど、絶好の対内的な点数稼ぎ  
 となる。  
 憤慨に堪えぬというのは、そんなこ  
 とではない。支那四千年の歴史を知る  
 我々は、大人になればそんなことは見

逃せなる。見逃せないのは、日本国首相の心構えである。

合祀された。

さて、戦犯刑死者も「援護法」や

抑々昭和殉難者(戦犯刑死者)を合祀したのは歴とした根拠がある。戦前は靖国神社は国の管理下にあったので、合祀の決定は陸海軍省が行った。ところが敗戦により軍がなくなり、占領下靖国神社は一宗教法人にさせられてしまった。そしてGHQの厳しい監視下にあり、合祀どころではなかったが、占領が終結した後、お国の為になつた人を早急に合祀すべきであるという声が、遺族会や戦友などの間に沸き起こった。そこで戦没者援護業務を担当している厚生省は、都道府県の協力を得て合祀者を決定し、名簿を神社に渡して宗教法人である靖国神社が、毎年合祀するというルールが確立した。しかし厚生省にも合祀に該当するか否かの判断に法的根拠がないと困るので、「戦傷病者戦没者遺族等援護法」と「恩給法」のいづれかに該当する者という基準をたてた。従来は合祀は軍人軍属だけだったが、援護法の適用範囲が広がるにつれ、戦争中に国家の為に命を落した者や、国の命令によって行動中に死亡した者にまで拡大したので、その人々も御祭神となった。例えば空襲下殉職した警防団員とか、対馬丸で海没した沖繩の疎開児童などが該当し、

「恩給法」のいづれかに該当する者という基準をたてた。従来は合祀は軍人軍属だけだったが、援護法の適用範囲が広がるにつれ、戦争中に国家の為に命を落した者や、国の命令によって行動中に死亡した者にまで拡大したので、その人々も御祭神となった。例えば空襲下殉職した警防団員とか、対馬丸で海没した沖繩の疎開児童などが該当し、

首相の参拝を行うための環境整備として、所謂A級戦犯の分祀とか、靖国神社の特殊法人化などとなる政府首脳がいるが、これこそ不戦敗と言うべきである。

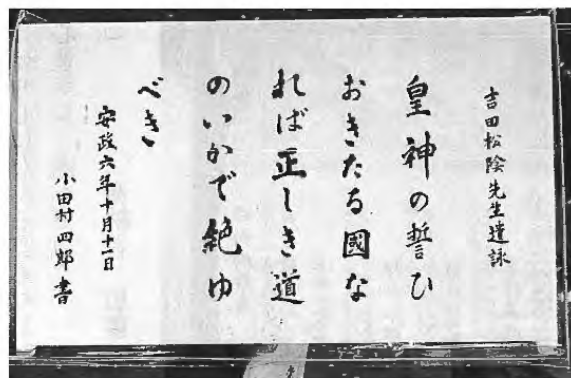
### 三、吉田松陰先生の遺詠

皇神の誓ひおきたる国なれば

正しき道のいかに絶ゆべき

安政六年十月十一日

小田村四郎書



吉田松陰も靖国神社の御祭神である、この雪洞を見て靖国神社の歴史の重厚さをしみじみ感じた。

安政六年十月十一日という日付について、この頃は伝馬町の獄に繋がれ幕府の評定所で取調べを受けていたが、まだ死罪とは予期されていなかった。その後何回か取調べを受け、十月二十日頃になると死罪と思つたのであろう。遺書を書き始め、家郷の父や兄、杉家の母、吉田家の養母宛のものに次の歌

が認められていた。

親思うところにまさる親心

けふの音づれ 何ときくらん

またその頃書き続けていた「留魂録」に、十月二十六日付で

身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし 大和魂

松陰が処刑されたのは十月二十七日である。早朝呼出しの声をきいて

此の程に思ひ定めし出立は

けふきくこそ 嬉しかりける

と認め、次の詩を吟じ曳かれていった。

吾今為国死 われ今国の為に死す

死不負君親 死して君親に負かず

悠悠天地事 悠悠たり天地の事

鑑照在明神 鑑照 明神に在り

なお雪洞奉納者の小田村四郎氏は、

松陰先生の妹の曾孫にあたる。

数ある雪洞のうち昭和殉難者と安政

大獄に死した烈士、一脈通ずるものがあると覚えた。



松陰神社 (世田谷区若林)



## 忘れがたい人たち 回天③

小灘 利春

## 石川 誠三

茨城県。兵学校72期。大津島基地、回天搭乗委員回天金剛隊伊58潜水艦にて出撃、20年6月12日グアム島アブラ港に突入、戦死。海軍少佐。

海軍兵学校七二期の六百人中、九番で合格した秀才であるが、肩幅のある太った体つきの、陽気な人物であった。米国駆逐艦「アンダーヒル」を撃沈した故・勝山淳少佐と同じ水戸中学の出身で、同様に典型的な水戸っぼである。自らの思うがままに行動し、軍隊の組織のなかにあっても天衣無縫、時に奔放不羈とも見えた。

私と一緒に第十六戦隊旗艦の重巡洋艦「足柄」の乗組になり、彼は航海士をつとめた。わる気はないが遠慮のない物の言い方なので、艦内で波風を立てることもしばしばであった。しかし、攻撃的に見えて相手の事情を的確に洞察しており、蔭の配慮も行き届いていた。名実ともにリーダーの資質を備えていたと言える。その故に、今も彼への愛着を語る友人が少なくない。

彼は私とともに回天の搭乗員を命ぜ

られて大津島で搭乗訓練に入った後も、明るい表情で我がもの顔に闊歩する態度は変わらなかつた。

回天特攻の出撃が始まり、石川中尉は第一陣の出撃者に選ばれた。しかし海軍上層部は海上戦術、特に奇襲兵器使用の根本である「先制・集中」の大原則に背いて、出撃の規模を直前に大幅カットしたために外され、彼は第二陣の金剛隊伊号第五八潜水艦で19年12月30日大津島を出撃した。

その日の朝、彼は最高に上機嫌であった。そして、「オイ、予科練を鍛えろ」と、搭乗員分隊長の私に一つだけ注文をつけて出ていった。

工藤義彦中尉、森稔二飛曹、三枝直二飛曹とともにグアム島アブラ港を目指して進み、1月12日未明、母艦甲板上の回天に乗り移った。発進予定地点へ潜航接近してゆく母艦の中で、連絡係の砲術長が電話機に耳を当てると、発進準備万端を終えた石川誠三中尉が独り操縦室内で吹く口笛が聞こえてきた。

「目ん無い千鳥の高島田  
見えぬ鏡にいたわしや  
曇る今宵の金屏風  
誰の咎やら罪じややら  
千々に乱れる思い出は  
過ぎし月日の糸車——」

あとは予定地点に着いたら母艦を離れて突撃、散華する。その時を待つのみ  
の虚心坦懐の姿であった。

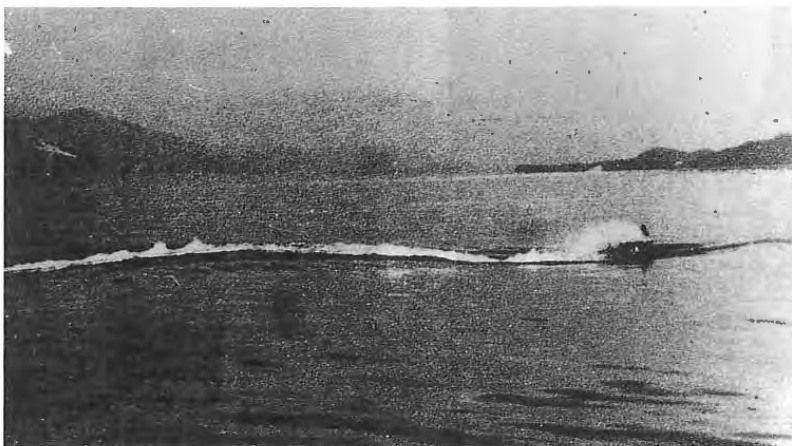
アブラ港の沖合に到着して艦長の指示を受け、一号艇の石川中尉は声高らかに「天皇陛下万歳」を奉唱して発進、続いて三艇が次々と発進して一路、敵艦船の停泊地へ水中進撃していった。

彼にも多くの遺詠があるが、率直な性格であるだけに、母上に対する愛情も家族への思いも飾らずに表現しており、特攻隊員としては異色のものがある。

戦後私が復員してから、御遺族に連絡をとったところ、折り返し母上から長文の御便りを戴いた。国のために捧げたものながら命を喪った我が子に寄せる絶叫にも似た母親の思いが切々と記されていた。

母の愛情というのはかくも強く激しいものかと、私は強烈な衝撃を受け、声もなかった。回天で戦没した仲間たちの御両親のお気持ちも皆このようなものであろうかと、改めてひとりひとりの家庭に思いを馳せた。

彼の遺詠のひとつは、  
思はじと 思へどとかく思い出づる  
故郷の母よ 健やかにおはしませ



水上走行中の回天

### 遺書遺詠にみる靖国神社

戦死したら靖国神社に祀られ、祭事は国で手  
篤く行われるものと、誰もが信じていた――

を見れば判るので、書  
かなかった。階級は出  
撃時のものである。経  
歴について、(陸軍)  
陸士とあるのは航空士

官学校も含む、少候は少尉候補者、特操  
は特別操縦見習士官、幹候は幹部候補生、  
少飛は少年飛行兵、特幹は特別幹部候補  
生、仙台等地名を冠し乗員養成所とある  
のは通信省航空機乗員養成所のこと、  
(海軍) 甲(乙・丙) 飛は甲(乙・丙)  
種飛行予科練習生、特がついているのは  
特別飛行予科練習生を示す。

時任正明少尉 飛行予備学生出身  
25歳 第一草薙隊 4月6日出撃

父母宛の遺書の一節  
――正明、桜花咲く靖国の社、智三人  
の兄上の許に、そして親友松本峯一の  
居る所に一足先に行きます。

植村眞久少尉 飛行予備学生出身  
25歳 神風特別攻撃隊大和隊 19  
年10月26日比島海域に出撃

愛児への便りの一節  
――お前が大きくなって、父に会いた  
い時は九段へいらっしやい。そして心  
に深く念ずれば、必ずお父様のお顔が  
お前の心の中に浮かびますよ。

永尾 博中尉 飛行予備学生出身  
22歳 第三草薙隊 20年4月28日  
出撃 沖縄近海

父母宛の遺書の一節  
――父さん 大事な父さん 母さん  
大事な母さん 永い間色々とお世話に  
なりました。好子、寿子をよろしくお  
願ひ致します。

靖国神社発行「英霊の言乃葉」  
より

父母宛の遺書の一節  
――折がありましたら、靖国神社で待っ  
ておりますから、面会に来て下さい。

宮内 栄少尉 飛行予備学生出身  
22歳 第三草薙隊 4月28日出撃

父母宛の遺書の一節  
――折がありましたら、靖国神社で待っ  
ておりますから、面会に来て下さい。

島 澄夫少尉 飛行予備学生出身  
25歳 第三八幡護皇隊 4月16日  
出撃

弟宛の遺書的一端  
――達夫・広昭、俺は一足先にゆく、  
二人とも早晚後に続くのを信ず、二人

英霊の遺書や遺詠は沢山残っている  
が、その中で必ず死ぬときまっている  
特攻隊員の方が比較的多いのは当然  
である。ここに、それらの中から靖国  
神社に係わるものを拾ってみよう。

書いた人の陸海軍の区別は出典と経歴

凡例

義烈空挺隊 関三郎軍曹

また咲き出でん 靖国の宮

よしや身は千々に散るとも来る春に

靖国神社、そして桜、英霊の御心に  
深く刻み込まれていたからこそ、未だ  
に日本人の心を打つ。

靖国神社、そして桜、英霊の御心に  
深く刻み込まれていたからこそ、未だ  
に日本人の心を打つ。

靖国神社、そして桜、英霊の御心に  
深く刻み込まれていたからこそ、未だ  
に日本人の心を打つ。

靖国神社、そして桜、英霊の御心に  
深く刻み込まれていたからこそ、未だ  
に日本人の心を打つ。

靖国神社、そして桜、英霊の御心に  
深く刻み込まれていたからこそ、未だ  
に日本人の心を打つ。

靖国神社、そして桜、英霊の御心に  
深く刻み込まれていたからこそ、未だ  
に日本人の心を打つ。

靖国神社、そして桜、英霊の御心に  
深く刻み込まれていたからこそ、未だ  
に日本人の心を打つ。

靖国神社、そして桜、英霊の御心に  
深く刻み込まれていたからこそ、未だ  
に日本人の心を打つ。

靖国神社、そして桜、英霊の御心に  
深く刻み込まれていたからこそ、未だ  
に日本人の心を打つ。



同期の桜を歌う会





では参ります。お身体お大事に。

米津芳太郎少尉 少候24期 26歳

富嶽隊 19年11月13日出撃

ルソン島東方洋上

母宛の遺書の一節

親に先立つ不孝をお許し下さい。

さりながら大君の御楯として靖国の守護神になる芳太郎のご故母上もお喜び下さることゝ存じます。――

町田道教少尉 飛行予備学生出身

25歳 神風特別攻撃隊筑波隊 20

年5月11日出撃 沖繩近海

母宛の遺書の一節

それから若い盛りの綾子にもだいぶ苦勞をかけた。化粧もせず、着物もきず、たゞ家の為働いてくれるのを思うと全く頭が下ります。よい婿さんを見つけや下さい。サエ子ちゃんもよい子になるようお願い致します。私も靖国神社からそれを祈って居ります。

にして下さい。

近所の人々、親族、知人、小学校時代の先生によろしく、妹にも……後はお願ひします。では靖国へまいります。

昭和二十年四月六日午前十一時書

小川 清少尉 飛行予備学生出身

24歳 神風特別攻撃隊第七昭和隊

20年5月11日出撃 沖繩近海

両親宛最後の便りの一節

殊に母上様には御健康に注意なされお暮し下さるよう、なお又、皆々様の御繁栄祈ります。清は靖国神社に居ると共に、何時も何時も父母上様の周りで幸福を祈りつゝ暮しております。清は微笑んで征きます。出撃の日も、そして永遠に。

「都城疾風特攻振武隊」より

沖繩戦で都城飛行場から出撃した陸軍特攻の記録

田中 治伍長 少飛13期 20歳 第

六〇振武隊 5月20日出撃

父宛遺書の一節

永の御不孝平に御許し下さい。治は先に失礼致しますが、靖国の社頭より皆様の御健康を祈ります。

若杉正喜伍長 少飛15期 20歳 第

父母宛の遺書の一節

齊は男子の本懐これに過るはなし

松尾巧一飛曹 乙飛17期 20歳 神

風特別攻撃隊第三御楯隊 20年4

月7日出撃 沖繩近海

両親宛の遺書の一節

私の小遣が少しありますから、人に頼んでお送り致します。何かのたし

六〇振武隊 5月4日出撃

靖国の桜となりて薫る日の誇を胸に 秘めて飛立つ

永島福次郎少尉 特操1期 22歳

第二六振武隊 6月21日出撃

遺筆の一端

靖国を安住の地と定めたり、我が心は静寂清明

靖国ノ御社ニ咲ク若桜

元氣日増に旺盛 唯一日千秋の思ひにて出撃の日を待つて居ります。

既に隊員五名悠久の大義に殉ぜらる。残る吾等 亦神鷲に続かん 飛機整備完了しだいなつかしの都城に転進 爆

装完了沖繩へ……

再び会うことやなし

何時の日靖国で会う事ならんや

西宮忠雄少尉 特操1期 23歳 第

二六振武隊 6月21日出撃

遺筆の一端

靖国で共に飲まうか五色酒

花の都の靖国神社 酒豪 青年将校

一死元来不足論

と喜び笑って死にます。では次は靖国神社にて

「陸軍最後の特攻基地」より

沖繩戦に万世より出撃した陸軍特攻の記録

大島 寛伍長 仙台乗員養成所 20

歳 第七四振武隊 4月7日出撃

辞世

さくら さくら若桜

明日は九段の花と咲く

荒木幸雄伍長 少飛15期 18歳 第

七二振武隊 5月27日出撃

最後の便りの一節

本日(廿七日) 出発します。

必ず大戦果を挙げます。

桜咲く九段で待っています。

どうぞ御身御大切に

弟達隣組の皆様にお宣敷

瀬谷隆茂軍曹 仙台乗員養成所 20

歳 第四三三振武隊 5月26日出

撃

両親宛の遺書一通の一節

御両親様どうか何時までもいつまでもお元気で皇国の為に御健闘下さい。では靖国で会う日を楽しみに隆茂は征きます。

明日は戦友が待っている靖国神社

に行く事が出来るのです。日本男子と生れ本懐これに過ぎるものありません。お父さんお母さん、隆茂は本当に幸福です。では又靖国でお会ひませう。待つて居ます。

若尾達夫軍曹 古河乗員養成所 21 歳 第四三二振武隊 5月26日出撃

同僚の遺品の中にあつた一文 松本兄、君とは古河、仙台、平安鎮といつとも一緒だったね。愈々大望の特攻隊に召されて、これからも亦死を共にする同じ隊とは……思えば山あり河ありの幾星霜、一緒に散らう、そして靖国でまた一緒にならう。

花でさへ 潔よく散る若桜 大和男の子の俺達が 御国の為に 散るのなら 何の桜に負けやうぞ

日の本の 男に生れ光栄は 死して屍は帰らずも 魂永久に 靖国の 護りの神と我ならん

岸田盛夫伍長 少飛13期 21歳 第六四振武隊 6月11日出撃

出撃前夜の手記の末尾 俺には靖国神社に弟が待っている。道案内を弟に頼むんだ。羨ましかろう。

「知覧特別攻撃隊」より

沖繩戦に鹿児島知覧を出撃した陸軍特攻の記録

佐藤新平曹長 仙台乗員養成所 24 歳 第七九振武隊 4月19日出撃 留魂録(日記)より 三月二十九日

同期も大分戦死とのこと、靖国神社の同期生会に立派な武勇伝の一席、土産に出来る如く努力せむ。

お母さんへ——あの時お母さんと東京を歩いた思出は、極楽へ行ってからも、楽しいなつかしい思出となることでしょう。

あの大きな鳥居のあつた靖国神社へ 今度新平が祭られるのですよ……手をつないでお参りしましたね。

浅川又之少尉 幹候9期 23歳 第四三振武隊 4月6日出撃 兄宛の辞世の歌

桜花と散り九段に還るを夢に見つ 敵艦屠らん 我は征くなり

榊原吉一軍曹 仙台乗員養成所 20 歳 第六三振武隊 6月7日出撃

父母宛の遺書の一節 九段にて再会望みます。

「サヨウナラ」「サヨウナラ」

靖国神社編「いざさらば我はみくにの山桜」より

富沢幸光中尉 飛行予備学生出身 22歳 神風特別攻撃隊第一九金剛隊 20年1月5日出撃 ルソン島近海

父母宛の手紙の一節 ——お正月もきました。幸光は靖国で二十四歳を迎えることにしました。靖国神社の餅は大きいですからね。

安則盛三中尉 飛行予備学生出身 21歳 神風特別攻撃隊第七昭和隊 20年5月11日出撃

本文の説明より 安則中尉は四男、そして五人兄弟の中ただ一人の戦死者となった。すべてを見通していたかのような安則中尉の辞世は

はらからの五人そろつて旗のもと 一足先に 四男坊征く

「五月十一日の命日には靖国神社に参拝してやってくれ」という父の遺言を守り、三男の三作さんは命日祭である永代神楽祭に毎年参列している。

「特攻隊遺詠集」より 特攻隊戦没者慰霊協会発行の本で、

特攻隊員が出撃にあたり心情を吐露した詩歌約八百点を、解説を付して記述したもの。(28ページ参照)

高石邦雄大尉 陸士54期 24歳 航空特攻石腸隊長 19年12月5日出撃 比島方面 大君の醜の御楯となりし身は 靖国社頭の花と咲かなむ

天野三郎少尉 陸士57期 22歳 航空特攻一宇隊 12月5日出撃 比島方面 (妹天野和子の歌)

靖国の社に向いて合掌す レイテの島に散りし兄見ゆ

福山正通中尉 海兵72期 23歳 神風特攻隊金剛隊 20年1月5日出撃 比島方面

たらちねのちは迎えん靖国に 明日はゆくなり南溟の空 磯部 豊中尉 飛行予備学生 22歳 神風特攻隊金剛隊 20年1月5日 比島方面

日 出撃 比島方面 我も又還らぬ友の跡追いて 靖国の宮の若桜と散る

島村中一飛曹 乙飛15期 20歳 第

1 神雷桜花隊 20年3月21日出撃  
沖繩方面  
大君の辺にこそ散らん櫻花

今度咲く日は九段の社

柏谷義蔵少尉 乙飛4期 32歳 第

1 神雷隊 20年3月21日出撃

覚悟して大海原に羽撃はたきの

響きは永久に靖国の社

棚橋芳雄二飛曹 丙特飛14期 22歳

桜花隊 20年3月21日出撃

若鷲は南の空に飛び立ちて

還るねぐらは靖国の森

長谷川実大尉 陸士55期 24歳 第

20 振武隊 20年4月2日出撃 沖

繩方面

春まだき九段の花と咲き散りて

勝ちみ戦の基開かん

浅川又之少尉 幹候9期 23歳 第

43 振武隊長 20年4月6日出撃

沖繩方面

桜花はなと散り九段に還るを夢に見つ

敵艦屠らん我は征くなり

清水 定伍長 少飛12期 21歳 第

44 振武隊 20年4月7日知覧出撃

沖繩方面

いざ征かん弾も敵機も何かせん  
今日は九段の花と咲く身は

大島 寛伍長 仙台乗員養成所 14

期 19歳 第74振武隊 20年4月

7日万世出撃 沖繩方面

さくらさくら若桜今日は散りしも

明日は九段の花と咲く

梅村要三伍長 印旛乗員養成所 19

歳 75振武隊 20年4月16日万世

出撃 沖繩方面

錦着て白木の箱で九段坂

いざ吾征かん特攻隊

田熊克省少尉 海軍飛行予備学生13

期 27歳 菊水部隊天桜隊 20年

4月16日串良出撃 沖繩方面

大君の御楯となりて吾は今

翼休めん 靖国の森

服部武雄伍長 少飛14期 19歳 第

105 振武隊 20年5月25日知覧出撃

沖繩方面

国の為生命捧げし若桜

弥生の空は 九段坂上

若杉正喜伍長 少飛14期 20歳 第

60 振武隊 20年5月4日都城東出

撃 沖繩方面

靖国の桜となりて薫る日の  
誇を胸に 秘めて飛立つ

磯貝 巖中尉 海軍飛行予備学生

24歳 第5神劍隊 20年5月4日

鹿屋出撃 沖繩方面

靖国の花と咲かなむわれもまた

いくさの庭に散りし友らと

中内静雄二飛曹 乙特飛1期 18歳

第8神雷攻撃隊 20年5月11日

鹿屋出撃 沖繩方面

身はたとへ南の海に朽ちぬとも

やがて九段の 花と咲くらむ

近藤 豊伍長 少飛15期 18歳 第

111 振武隊 20年6月3日 知覧出

撃 沖繩方面

轟沈の空は青空靖国に

笑顔で迎へる 母の面影

高村統一郎少尉 特操1期 27歳

第112振武隊 20年6月3日知覧出

撃 沖繩方面

我がつとめ果して逢はん九段坂

桜の庭で 姉の待つらむ

巽 精造少尉 幹候9期 24歳 第

64 振武隊 20年6月11日万世出撃

沖繩方面

俺の住家は九段と決めたよ  
しばし浮き世は仮のやどよ

座間重信中尉 陸士56期 23歳 神

翔攻撃隊 20年4月11日 ニコパ

ル諸島

大君の為にぞ散れと教ふらん

靖国社頭の 若き桜は

山本正記伍長 特幹1期 20歳 海

上挺進第17戦隊 20年2月10日

マララ湾

靖国の社にしづまる武士ぶしの

み霊たまごに続く 若桜かな

宗像幹夫伍長 特幹1期 20歳 海

上挺進第6戦隊 20年2月13日

比島リサル州

征けば帰らぬあづさ弓

靖国の社 我を待つらん

引田耕一郎少尉 幹候10期 23歳

海上挺進第2戦隊 20年3月28日

沖繩慶良間

国の為嵐に向う山桜

咲くは何処ぞ 靖国の社

木村 実少尉 幹候10期 23歳 海

上挺進第10戦隊 20年7月19日

ルソン島地上戦闘



憂国丈夫大義 九段社頭謝久闊

久司博敏曹長 海上挺進第26戦隊

20年5月13日 沖繩地上戦闘

若桜国の鎮めと散りしとも

永久に咲きませ 靖国乃花

古野繁実中尉 海兵67期 24歳 真

珠湾攻撃特殊潜航艇々長 16年12

月8日 ハワイ

靖国で会う嬉しさや今朝の空

(父に送った句)

原 敏郎中尉 予備学生3期 28歳

回天金剛隊伊47潜 20年1月12

日 ニューギニアホーランジャ

靖国の桜と咲かんとこしえに

南の海に果つるこの身も

加賀谷 武大尉 海兵71期 24歳

回天金剛隊伊36潜 20年1月12日

ウルシー泊地

驕敵を三途の川迄吹き飛ばし

身は九段の花と咲かなむ

このようにその他の書物からも引用すれば、靖国神社に係わるものは数限りなくある。たとえ靖国の文字が遺書や遺詠の中に無いにしても、誰もが戦死したら靖国神社に祀られ、国民の

尊崇を受け、祭事は国で手篤く行われるものと信じていた。現在確かに靖国神社に祀られ、祭事は神道に則り神社当局により行われ、勅使も御差遣になっている。また年間を通じ参拝者の絶えることはない。然し政府は全く知らん顔をしている。神道という特定宗教に係ることは憲法違反だという説もある。国の為に命を棄てた人を祀ることは、憲法よりもっと高次元の問題である。国で祭事を行えば非難する外国があり、友好を害するというような考えは論外である。自ら国の独立を放棄するものである。

確かに靖国神社の参拝者は多いが、それは東京近辺の者であって、地方の人達は遺族会行事で上京する団体が参拝するだけである。地方在住の戦後に育った年齢層は靖国神社の存在さえ知らぬ。それはその筈である。靖国神社の春秋の大祭があって勅使御差遣になろうとも、また「みたま祭り」という御祭神を慰める光の祭典があるうとも、新聞は一行も報道しようとしな。それでは地方在住の若い者が靖国神社を知る訳がない。御祭神の戦友だった者は早晩世にいなくなる。御祭神の遺族も子の代はあと二十年か。行末が案じられる。

問題」である。東京裁判史観に洗脳された出版商人達は、各地の採択委員と手を結び、自虐的虚構を書き立てて憚らない。文部省の教科書検定に携る役人とその上に立つ政治家も、我々から見れば一つ穴の貉である。

小中学校の教科書に靖国神社のことが載るようにならねば、やがて国民から忘れ去られてしまう。今の政治家に対し「学習指導要領」にそれを明示せよと言っても、靖国神社に参拝もしない者に通用しないだろう。御祭神の御心を察し祖国の前途を思うと、寒心に堪えない。

国民の生命財産を守り国土を保全するのは、政府の基本的な責任である。ところがそれがなされていらない。北鮮による日本人拉致事件が発生したり、領海が侵犯されたりしている。竹島や尖閣諸島は奪われかかっている。また北鮮のミサイル攻撃がありえないという保障はどこにもない。そうなれば憲法の前文を振りかざしていても、我々の安全と生命は保持できない。戦わざるを得ない。そのとき真先に矢表に立つのは自衛隊員である。

「自衛官の心がまえ」には、「我が国に対する侵略が行われるときは、これを排除することを主たる任務とする」と謳い、「事に臨んでは、身をもって

職責を完遂する覚悟がなくてはならぬ」と論じている。甚々生ぬるい言い廻しであるが、戦争になったら生命を賭して戦えということである。ところが、近い過去に於て、生命を賭して戦った靖国の英霊に対し、自衛隊の最高指揮官たる内閣総理大臣が参拝もしないでは、自衛隊の統率を本気になって考えているのか。自衛隊の記念日や防衛大学の卒業式でえらそうに訓示しているが、何と白々しいことか。

ここに述べたことが読者を通じ世論に少しでも影響を与えることがあったならば、特攻英霊の余徳に帰すべきである。



小灘 利 春  
 (全国回天会会長)

## 予科練出身搭乗員 の出撃者選抜

昭和19年11月の或る日、回天の訓練基地である徳山湾の大津島で、隊内を回り終えて、今は回天記念館が建っている丘の広場から一段下にある士官宿舎の自室に戻ろうとした私は、異様な光景を見た。宿舎二階の自分の部屋から、予科練出身の下士官搭乗員の行列が長く続いて、階段を過ぎ建物の外まで連なっていた。一瞥して事態を覚った私は、「しまったー」と叫んで思わず駆け出し、自室に飛び込んだ。

事の次第は、回天の搭乗員で三回も潜水艦で出撃しながら遂に生き残り、戦後真先に自伝として回天の戦記を書いた、上等飛行兵曹故横田寛氏が或るものに載せた記事を引用すると、

『第一陣、菊水隊の出撃直後、夕食をとっていた我々のところに、分隊長小灘中尉が静かに入ってきた。「食事中ではあるが、大事なことであるから皆聞いてくれ……」と前置きをして、

「我こそは予科練の一番槍だぞ……と早期出撃を熱望する者があったら、後

ほど俺のところへ来い。よく考えた上で行動を起こせ。今夜12時まで俺は床に入らない。俺はその時、その理由も聴く」

と言ったかと思うと、やはり静かに去って行った。

皆はシューンとしてしまった。夕食が終わった……。私は迷った。どうしようどうしよう、仲間と相談する訳にも行かず、さてどうしよう……。迷いながらも、いつの間にか足はとぼとぼと士官宿舎に向かって歩いていたのである。気が付いたら分隊長の部屋のドアまで来てしまっていた。既に四人が、口をへの字にして順番を待っている。私が最後であったが……後から誰かが行ったらしいが、それは誰だか判らない。』

実際は四人や五人どころではなかったのである。引用を続ける。

『部屋に入って、視線が火花を散らした。暫くして……

「貴様かあ……間違ひなく来るとは思っていたよ。理由を言ってみろ……」

瞬間私は、彼の期待を裏切らなくてよかった、とは思ったが、理由など考えてはいなかった。ええままよ、と次のように答えた。

「物事は早い者勝ちと言います。先輩たちが次々に出撃して、敵の前線基

地を荒し回ったら、大物の空母はいなくなってしまうかも知れません。私は巡洋艦以下のザコなんかと心中したくはないのであります。それに……」

「それに何だ……」

「私は幼少の頃母に死なれて、母の愛情というものを知らないまま大きくなってしまいました。親爺の野郎がバカな奴で……」

「一寸待て。貴様今、何と言った。大事な父上を野郎だの、バカだのとは聞き捨てならんぞ。貴様そんな教育を受けたのか……」

「受けません。しかし、バカだからバカだと言ったんです。女房に死なれ、三年も経たんうちに、前の女房よりずっと若い女を後添えにして、その言いなりになり、そいつと一緒にあって末っ子の私をないがしろにしたような人間が、お利口さんと言えますか。俺は親爺が大嫌いだ。私が兵学校に入学できなかったのも、学科は最後まで行ったのに憲兵に家庭状況を調べられたからなんです。」

お袋の命日は12月の末です。どうせ死ぬなら、その前後にお袋のところへ行きたいのです。分隊長はそんな教育と言われましたが、親孝行親孝行と、

カラ念仏を百万遍唱えさせたって、そんなものは真の教育ではないと思いま

す。その位のことは分隊長にもお判りかと思えます。」

小灘分隊長は苦笑しながら、

「もういい、判った、しかしなあ、親爺のバカ野郎は今日限り止める……」

「じゃ帰りますが、出撃の方はよろしくお願いいたします。」

出撃前の志願にはこんないきさつがあり、親爺についてはその後、心でも口には出さなくなった。彼には記憶がこの様に残っていたのであるが、若干相違点がある。私は、「懐かしい母の写真を抱いて突撃した」という彼の希望は確かに聞いた。

しかし、あとの父の話は全く聞いていない。彼が兵学校を受験したことなど、戦後まで私は知らなかったし、このような場合に出てくる事柄でもない。また、彼ひとりだけに期待するよ

うな言い方は、私はしない。たしかに、懸命な陳情ではあった。しかし、ほかの皆は直立不動の姿勢で真剣に話すのに、彼だけは馴れ馴れしく、私の顔をのぞき込んで「だからサァー」といった口調で甘えた言い方をする

ので、私がかんざんとむずかしい顔になってゆくのが自分で判った。

私は自室の入り口に立った儘、長い列の一人一人から、早く出撃したいという熱情を聞かされて、「私は今、素

暗らしい部隊に居るのだな」と深い感動を覚えた。

19年11月といえば大津島にいる予科練出身搭乗員としては土浦航空隊からの一〇〇名だけの時期であった。既に第二陣の金剛隊で、予科練出身初の出撃搭乗員として、北海道滝川中学校出身の森稔、山梨県甲府中学校の三枝直の二人が決定していた。その三枝二飛曹もこの列の中に並んでいた。

「判っている。もういい」と私は一応言ったものの、改めて彼が語る、甲府中学の五年生から、国のため、学校のためを思い、先頭を切って予科練を志願した真情を聞いた。

どうしてこんな騒ぎになったか。私は第一特別基地隊大津島分遣隊指揮官の板倉光馬少佐から、分隊員のなかの出撃適格者を推薦するよう指示を受けていた。救国の兵器、人間魚雷「回天」は当然、集中的に大量生産される筈である。兵器が出来次第、士官も下士官も、これからどんどん出撃するであろう。そうでなければ、この国も民族も破滅であるから、「早いか遅いか、僅かな違いで、いずれ一人残らず出てゆく」と、私は信じていた。

第一次出撃の士官搭乗員の選考が行われた際に、板倉指揮官から私自身が「最初に出撃したいと言うのには、何

か特別な理由があるか？」と聞かれてやりとりした経験があったので、たとえ僅かな順番の差であっても、特にその必要がある人間が、もしもいるのであれば、優先させることを考えたほうが親切であろうと、私は思ったのである。

それで、「何か特殊な事情がある者は聞こう」とだけ、皆の前で気軽に言っってしまったが、こんなにも多数の人に、強烈な反応を起こす時まで予想しなかった。自分の軽率さを悔いると共に、搭乗員たちへの信頼感、一体感を一層深める結果となった。

出撃適任者のリストは、分隊士の小林富三雄少尉と協議して作成し、板倉指揮官に提出した。予科練出身者の搭乗訓練割当と、出撃者の指名が、それからは増えていったが、こちらの推薦通りとは限らなかった。次々と訓練に入り、それらの成果の積み重ねから、自ずと適任者が生まれていった感じになって、分隊長として再び推薦者のリストを作成することはなかった。

かのとき、「出撃させてほしい」との熱意を真剣に吐露するひとりひとりの眼差しと言葉が、今も目の前に鮮烈に浮かんで来る。彼等の清々しい、真摯な至情が、今の世に広く伝えられ、理解されているとは言えない。寧ろ、

「日本人の心が判らなくなった日本人のほうが多い」とさえ思われるこの頃である。

当時の仲間が記録し、語り継いでゆくことが、戦没した彼等の為にも、この後の日本のためにも意義があると思う次第である。

## 回天のハッチ

「回天のハッチは、閉められると内からは、絶対に開かない」とは、よく聞く言葉である。事実には正

反対なのに、である。

「嗚咽しながら整備員が、ようやくハッチのボルトを締めた。盲蓋が堅く閉じられた。海水が一滴も入らないように。そして、永遠に開くことがないように。厳粛なハッチ閉鎖の儀式が終わった」という類の、悲壮な記述が繰り返される。だが回天には、外から締める「ボルト」も「盲蓋」なるものも、全く存在しないのである。

回天を扱ったテレビ番組や図書は数多いが、「外から閉められたら、搭乗員が泣いても喚いても、開けて貰えない」「脱出装置を中止したため、艇外に出られず殉職した」などと記している。このような記述ばかりであるから、

多くの人々そのとおりに信じ込み、「特攻兵器なら当然、そうなっているのだろう」と、寧ろ納得している節があるが、次の事実から簡単に否定されるほどの、幼稚な誤認、歪曲である。

回天の上下二カ所にある出入口「ハッチ」の蓋は、開閉ハンドルが、いずれも艇の内側だけについている。外側には、ハンドルがないのである。このことは回天の実物や写真、図面を見れば一目瞭然ではないか。大体、水の中を30ノットの高速で走るのに、無用の突出物があれば、抵抗が増えるだけである。

搭乗員は、乗艇してのち、頭のすぐ上にあるハッチの開閉ハンドルを、ぐるぐる廻して自分で閉め、出るときも自分が、ハンドルを逆に廻して開ける。これが基本の操作である。ただ、ハッチ口の後ろに立ててあるハッチ蓋は、鋼製なので重い。閉鎖するときは、最初にこれを倒して、ハッチ口に被せるが、艇の上に立っている整備員が、この作業を手伝ってくれる。また、搭乗員が中からハンドルを回して、ハッチを閉鎖したのち、ハッチ蓋の上にある二つの小さな窪みに、専用の細い金具を上から嵌めて廻し、閉鎖が完全かどうかを確認してくれる。これも、あくまで搭乗員の介添え役として行う「補



助作業」である。

昭和19年9月の初め、人間魚雷・回天部隊が創設され、山口県徳山湾外の天津島基地に集まった海軍兵学校、機関学校出身士官と兵科三期予備士官、あわせて三四名の搭乗員が、初めて回天の操縦訓練に入るとき、創始者のひとり仁科関夫中尉(当時階級)から、「いいか、ハッチは自分で閉めるものなんだぞ。開けるときの、自分で開けると念を押された。

私も「それが武士のたしなみであろう」と素直に受け入れ、縦横席に座って海面に降るされる前に、ハッチの開閉ハンドルを自分で力一杯、確実に締めつけたし、訓練が終わってハッチを開けるときの、クレーンで水面から引き揚げられて魚雷調整場の架台の上に据えられたあとそれを確認して、ハンドルを廻して開き、自分で外の空気の旨さを味わった。

回天の内部は、鉄錆の臭いが強く、高圧の気蓄器や、その配管が多数あるため内部の気圧が時間とともにどうしても上がって来る。ハッチ蓋を緩めた途端「シュッ」と音がして艇内の空気が抜け、時には白い煙が立つほどである。酸素量も減っているの、搭乗訓練を終えて外気を吸う喜びは、潜水艦

乗りが長時間潜航後に浮上するときと同じであろう。

整備員がハッチの閉鎖状態を確認するのは、若しも不十分のまま潜航し、水圧がかかってくると、搭乗員の頭の上から海水が噴出して、ずぶ濡れになるからである。親切のための作業であるのに、遠くからこれを見た人間が、「外からハッチを閉められる!」「中からは開け閉め出来ないだろう」と思いつく可能性はある。

この閉鎖確認の作業を「増し締め」と言ったが、勿論中からハンドルを十分に廻してあれば、それ以上は締められない。雑誌、新聞などに「回天搭乗員の手記」と称するものを散見するが、「ハッチは中から開けられない」と書いたものが少なくない。著者が偽者であることを、自分で証明しているのである。

横抱艇がすぐ側にいる浮上状態の艇から、操縦者と同乗者の2人がハッチを開けて飛び出したために、回天を沈没させた事件があった。論外の失態ではあるがハッチを中から開けることが出来る証明にはなるであろう。

訓練中、事故で沈んだ艇から、ハッチを開いて脱出した例が幾つもある。海底に沈んだ場合は、強い水圧がハッチ蓋にかかるので、そのままでは開け

にくい、損傷箇所があって浸水してくると、艇の内外の圧力がバランスするので、それを待って、ハッチを手で押し開けて外に出ている。

「外からハッチを締めつけるボルト・ナット」とか「上から取り付ける盲蓋」とか。そんなものが回天に存在するかどうか、物を書く人は図面や実物を、一度見てからにしてほしい。「外から閉じ込められる」「中からは開けられない」という話は、みずから生命を大いなるものに捧げる「特攻兵器」の性格からも、構造上からしても、あり得ないのである。

我々が特攻兵器「回天」の搭乗員になったのは、自らの判断、希望からである。自分の使命、生き甲斐に納得しての搭乗である。「軍部に強制されて」「人間魚雷の操縦席に、無理やり押し込められる」、ひどいものになると「殴りつけて特攻をやらせた」と書く者がいるが、そのような性格の兵器では毛頭ない。

そんなことで操縦できる「回天」ではないし、ましてや命中できる筈がないではないか。回天は搭乗員が「自身」で乗り込み、自分の意思で突撃するものである。殊更に、中から開けられない仕組みにする必要も、意味もない。

それにしても、事実の逆の主張をするということは、回天を「非人道的な兵器」と、殊更に印象づけようとの企図であろうか。それは、民族と国土の破滅を防ぐため、進んで自らの生命を捧げた純粋な若人たちを侮辱するものである。このような記述が、現在および後世の、「特攻」に対する認識を狂わせてしまう懸念がある。

これら兵器の構進上の問題のみならず、隊の運営など回天についての同様の錯誤、乃至は作為の歪曲が、各種の刊行物に多数見受けられる。放置すれば他の刊行物に次々と引用されて、誤った「事実」が固定することになりかねないので、生き残った搭乗員の一人として、これからでも種々の誤解に対し是正に立ち向かう責務を覚える。



## 橋口 寛 大尉 自決す

I. ひととなり

故・橋口寛大尉は大津島基地で一期をともに過ごした同期生であるが、私は日頃「神に近い存在」と心の中で思っていた。透き通ったように純粹で無私無欲、しかも職務の一つ一つに最高の真剣さをもって臨んでいた。

彼の「第一特別基地隊付発令」は昭和19年8月20日である。重巡洋艦「摩耶」を降りて9月4日前後に一特基に着任し、倉橋島の大迫基地で甲種第一期飛行予科練習生出身、次いで予備学生出身の搭乗員多数とともに待機していた。

大迫を出て兵73期の羽田育三少尉、機54期の岡山至少尉、那知勸少尉と共に大津島に向かったのは、或る記録によれば10月30日となっている。回天隊創設当時の19年9月初めから我々兵学校72期とそのコレス機関学校53期の合わせて一四名が既に訓練に入っていたが、少し遅れたこの大津島着任の時期は私の記憶どおりである。

急造のバラックのような本部の二階に士官搭乗員の部屋があって、一緒に勤務し生活したが、普段の彼は無口で

物静かであった。苦しい気分のおきでさえニコニコと微笑を湛え、一緒にいると救われる思いがする、人に暖かい好青年であった。

それでいて、彼の回天操縦は緻密かつ勇猛果敢であり、特攻出撃にかけると熱意はまた凄まじいものであった。昭和19年11月8日に第一陣の菊水隊出撃、次いで12月末の金剛隊のあと、千早隊が20年2月20日に硫黄島に向かった。その伊号第三六八潜水艦、伊号第四四潜水艦の前任搭乗員は川崎順二、土井秀夫で、ともに同期生である。しかし、あとの一隻伊号第三七〇潜水艦の前任搭乗員が機関学校54期の岡山至少尉に決まったとき、彼は猛烈に怒った。

「後輩のくせに、俺より先に出撃する！」と顔を真っ赤にして叫ぶのである。横で聞いていて、「上の者から出るのが自然だが、出撃隊員を次々と組み合わせてゆく都合があるから、一人ぐら以後輩が間に入ってきて良いではないか」と思ったので、私は同調しなかったが、彼の薩摩隼人らしい烈々たる気迫には全く感心した。

本部二階の海寄りの部屋に、同期の搭乗員たちが出撃前夜には遅くまで遺書を書いていた事務机が並んでいる。彼はその机の上で、自分の左小指を切つて鮮血を湯呑み茶碗一杯に満たし、太

い筆に含ませて「早く出撃させてほしい」旨の嘆願書を何枚も書くのである。それを横目で見ながら「俺は彼よりも先に着任しているから、痛い思いをしなくても俺の方が先に出撃できるのだ」と、今思えば奇妙な「安心感」に浸っていた自分を思い出す。

19年11月25日に新しい訓練基地「光」が開隊、その前に彼は光に移った。何か用事があると我々は回天追躡用の魚雷艇とか高速内火艇に乗って大津島から光を訪ねたが、彼は特攻隊長三谷与司夫大尉(兵71期)に次ぐ搭乗員として、数多い予備士官、予科練出身搭乗員の指導的立場にいた。

或るとき、光で訓練中の搭乗員の一人について「どんな具合か？」と尋ねた。すると彼はたちどころに「その人間の優れた点はこう……。問題がある点はこう……。従って搭乗員としての適性はA Bの上と俺は判定する」と極めて詳細かつ明快な評価が返って来た。光基地にいる搭乗員は特に人数が多いのに、ここまでにも的確に、ひとりひとりを観察して性格、能力を見抜いているとは驚きであった。生来の指導者としての資質に終わらず超人的な努力を指導に注ぐ情熱は私など到底足元にも寄れないほどであった。

出撃が後回しになったのは大津島に

着任した順序の所為もあるが、彼の場合は回天隊全体の戦力アップの必要から後輩搭乗員の指導のために残されたものと、多くが信じている。一方、私のほうは「搭乗員分隊長の仕事を見目によっていると、指導官適任と見られて出撃から外されるのではないか」と真剣に心配をし始めて、分隊長の指導から故意に手を抜いていた。それが不心得であったと、彼の奮闘ぶりを見て反省するとともに、一層高まった尊敬の思いが今も消えない。

平生基地が次に新設されて20年4月17日、訓練を開始した。その前の3月始めに再び光から移った彼は、特攻隊長兼搭乗員分隊長として一層烈しく精進し、多くの人々に強い印象を残している。

「水中20ノットで敵艦に接近したあと、浮上し潜望鏡で敵艦の動きを観測して、針路を修正しながら、最大速度30ノットで水面上を突撃」という新機軸の襲撃法を開発するなど、彼は「回天兵器の性能の最大限活用」をめざしたと聞くが、自身が先頭に立っての操縦技術の向上にとどまらず、回天の戦力発揮のために技術面、精神面のリーダーとして渾身の努力を傾倒していたようである。

彼は昭和19年の初めには、回天と略

同じ構造の人間魚雷を計画し、しばしば上司に具申していたという。その話を本人から聞いたことはなかったが、一特基附の発令が彼だけ単独の日付でなされ、且つその日付が一般の隊員より早かったのはそのためと頷ける。戦局を見越す先見性と、何をなすべきかを突きつめて考える使命感から人間魚雷の構想に到達し、みずから実現して先頭に立つとした、当時の青年士官として最も立派な人物のひとりと言えるであろう。

## II. 自決の日付

橋口寛大尉は伊号第36潜水艦で出撃する直前に平生基地で終戦を迎え、自決した。その日付は、回天関係の或る著作物が8月16日と記載し、これが次々と引用されて定説となっていたが、あらためて当時の関係者に照会した結果、次のような状況が得られた。

①終戦の翌日、平生基地を出撃、その後命により引き返した神州隊伊号第一五九潜水艦の先任回天搭乗員齊藤正中尉によれば、

「出撃当日の8月16日朝、橋口大尉を含めての総員見送りを受けており、自決がその日の早朝という事は全く考えられない。」

18日午後平生に帰投して部屋に戻

ると根本克大尉(注・兵71期、特攻隊長)が飛んで来られて、後追いを危惧し「早まった事はするな」とかなり高ぶった調子で言われた。このことは自決直後だったためと思われる。従って、橋口大尉の自決は18日未明が妥当と思われる」とのことである。

②また、大津島分遣隊で回天一〇型搭乗員の第三分隊長であった足立喜次大尉の追想では次のとおりである。

「同じ山口県内の平生基地に転勤の予定であったが、8月15日正午の玉音放送を大津島士官宿舎の二階広間のラジオで聞き、戦争が終わったのならもう転勤する必要はないのではないかと疑問を覚えた。しかし指揮官板倉光馬少佐から予定通り移るよう指示があつて、8月17日朝大津島を退隊した。

平生に着任して、出撃直前であった同期、橋口寛大尉に会った。6月1日に大尉に進級しているのに肩章、襟章は中尉の儘であり、呉に行くというので自分の桜のマークを分けてやった。17日の夜を過ぎ18日未明、橋口大尉は、その貰ったマークで大尉の肩章に直した軍服を身に着けて自決した」

③伊号第58潜水艦航海長田中宏謨大尉

の手記を見ると、「8月17日多聞隊作戦から平生に帰着して基地に上陸、ささやかな招宴のち橋口大尉の部屋でウイスキーを出してもらい、懇談したあと潜水艦に帰ったが、別れるとき、橋口大尉は『明日、俺も呉に行かねばならない用事があるから、貴様の艦と一緒に乗せていって貰いたい』と言った。

明けて18日、最終帰投地呉に向けて平生を出港の朝、出港時刻になって橋口大尉が乗艦して来ない。あの几帳面な橋口が定刻に遅刻するなどことは考えられないと思いながら待っていたところ、しばらくして基地から一隻の艇が来て、橋口大尉の死を告げた」と記してある。

④一緒に出撃する予定の回天二号艇搭乗員中川荘治氏(平生基地、上飛曹)の回想記には、「8月17日の自分の日記に『巡検後イ36潜組(橋口、藤田、今藤、小森、中川、青木の六名)は思い出の丘(阿多田山)で橋口大尉が皆を集めて諭された』とある。(遺訓、それは我々の永遠に果たすことの難しい宿題だった。六名の者共に泣き、共に語った。戦いに敗れて神州はない、降伏に条件はない、と等々)」

「数時間後の18日未明、午前4時、

起こされる。少し前の午前3時20分に橋口大尉自刃された、と」

これらから自決は8月18日であり、時刻は未明であったことは疑いない。「16日」は、単に「終戦直後」の言葉から想像したに過ぎないようである。なお、公報は18日になっていた。

## III. 自決の場所、方法

自決の場所などの状況についてもまた、諸説が混在しているが、事実は次の記録から確定できると考えられる。

①前記齊藤正氏からの書状によれば「回天の艇内で、拳銃により胸部を撃った」とのことである。

②中川荘治氏の追想記では、

「早速今藤を起こして駆けつける。出撃魚雷の中でピストル自殺をされていた。ピストルは二発、発射されていたとか。胸を十字に撃ち抜かれて。またまた呆然たる面持ちである」

「穏やかな死に顔だったと今思い出す。隊内での葬儀にも参列した。先任者を失い、その後どうしたのか。確たる記憶さらに無し」

③平生突撃隊特攻長橋口百治少佐の書信からは、「8月18日〇二一五頃、当直士官の報告により、現場を検視、遺体は回天調整場にある回天の間に、これと並行して安置されていた。服



装は白の第二種軍装であった」という。  
すなわち「回天の前に正座して」或いは「跨がって」ではなく「艇内の操縦席」であった。「日本刀で自刃」ではなく「拳銃」であり、それも「頭部」ではなく「胸」「心臓」だったのである。しかも確実を期しての弾丸二発であった。回天乗りの自決としては最も相応しい形の最後と言えよう。なお平生基地の仲谷幸郎少尉によれば、橋口大尉は自決の前夜に床屋を呼んで身綺麗にしていたとのこと。

#### IV. 何故自決の道を選んだのか

私が復員して橋口寛大尉の自決を聞いたとき、驚きと同時に「彼なればこそ」と共感を覚えるものがあった。私とて戦争終結を聞き自決を思ったが、八丈島では臨戦態勢が終戦後も長く続いたため、きっかけを失った。思いは似ていても彼の場合、はるかに明確、強烈であった。

死にたくて死んだ特攻隊員は一人もないであろう。彼の場合も「個人的な理由で死にたくなくて死ぬ自殺」とは全く異質の「純粹な思いを貫徹する自決」と考える。湊川に赴く楠木正成と同じく、七生報国、自らの信念に殉ずる至純ではあるまいか。「人生に絶

望した」「世を憐んだ」たぐいの自殺と混同できるものではない。

人間魚雷採用を請願した文書、御両親に宛てた手紙、自啓録に残る所見や遺書から、彼の考え、心境は充分に汲み取ることができるのであるが、自決に至る彼の判断を敢えて要約すれば次の二点と言えるのではないかと思う。

##### ① 純忠報国の信念

終戦を迎え、至純至高の愛国心の凝縮である彼の心を占めたのは「吾人の努め足らざりしが故に神州は国体を擁護し得なかつた。その責を執らざるべからず」とした責任感であろう。

特攻長橋口百治少佐の述懐によれば、「故大尉の自決後、その部屋の整理の際、日記を発見、その几帳面さにびっくりした記憶がある。その日記の最後に、即ち自決直前に、

『臣道を尽くし得ざるを恨む』と大書してあったことを覚えている」と。

##### ② 同期生とともに

彼は回天の道とともに進んだ同期生への切々たる思いを自啓録に残しているが、更に遺書の最後に「さきがけし期友に申し訳なし。神州遂に護持し得ず」と記した上、「おくれても 亦おくれても 脚達に 誓いしことば われ 忘れぬや」

の遺詠で結び、続けて回天で戦没した同期生の名前を列記している。

「石川、川久保、吉本、久住、小灘河合、柿崎、中島、福島、土井」

同期の兵学校二期は回天隊開隊当時の九名、そのあと大津島に着任した橋口、三宅（渡辺）、中島の三名、合わせて一二名のうち一〇名が出撃し、或いは殉職を遂げて、残るのは平生基地の橋口寛、それに光基地の三宅（渡辺）収一の二人だけになっていた。（私の名前が入っているのは、出撃したまま帰らないので基地で戦死扱いになっていたため）

任務にはまっしぐらの彼は、一緒にいれば溶け込んで目立たないほどの良き仲間でもあった。それだけ同期生との一体感、連帯意識は強かったと今も思う。

#### V. 伊36は反転した

この5月、私は倉橋島と東能美島の間、の狭い水路「早瀬の瀬戸」をあらためて訪れた。今は両島を結ぶ高い橋がかかるこの狭水道に、終戦直前の8月11日、橋口隊を乗せるべく呉軍港を出て差しかかった回天特別攻撃隊神州隊伊号第三六潜水艦は、ここで米軍戦闘機の銃撃に遭った。駆逐艦以下の小型艦艇しか通れない、狭く潮流の速い水

道なので潜没できない。変針、回避もできない。艦長菅昌徹少佐は乗員を艦内に退避させてハッチ閉鎖を命じ、艦長と航海長松下太郎大尉の二人だけが艦橋に残って操艦し、何回となく繰り返される機銃掃射のなか、ひたすらに通峡を続けた。

艦長、航海長ともに負傷。損傷を受けた同艦はやむなく呉工廠に引き返した。修理は終戦に間に合わず、橋口大尉が待ち望んだ出撃は遂に叶わぬこととなったのである。

戦争中の人生は偶然によって切り分けられる。この運命の狭水道で敵機との遭遇がなければ、橋口隊は勇躍出撃したであろう。それぞれの搭乗員は今とは別な人生になったかも知れないが、仮に戦場で潜水艦から発進していれば、橋口隊は鍛え上げたその能力を最大に発揮して志のままに散華を遂げ、大きな戦果を挙げたのではあるまいか。その成果は日本民族の誇りを支え、必ずや戦後うちひしがれた国民精神のより速やかな回復に貢献したであろう。

ともあれ、彼の人格、品性、行動力は今後の日本の若人にとっても模範とする価値があり、後世に伝えたいものである。

## 追想「樋口寛大尉自決す」付記

光基地を大津島から訪れたとき、樋口中尉(当時)に、私(小灘)が知っている何人かの搭乗員の状況を聞こうと思ひ、「どんな具合か」と、先ず或る一人について尋ねたとき、彼はその人物の優れた点、問題がある点について極めて詳細に「立て板に水を流すような」との形容どおり、一気に述べて呉れた。

その具体的な内容は大体のことしか覚えていないが、そのなかで今も鮮やかな印象が残る言葉は、

「その搭乗員の人間性については申し分がないが、遺憾ながら決断が遅い。自分の《事》を決定する場合に考えるべき要素が幾つかある。しかし決断に不可欠な要素となると、そんなに多くはない。

回天を操縦する際、特に敵艦めがけて突入する最後の浮上観測では、一瞬の躊躇も許されない。しかるに彼は無視してよい事柄まで、あれこれと考えるので迷いを生ずる。その結果、最善のチャンスを失うことが、性格的にある様と思う。

従って、回天搭乗員の適性としての

評価は、此の点だけをもって、かなり下げざるを得ない。彼の適性は《Bの上》と俺は判定する」

光基地の特に人数の多い搭乗員の一人に過ぎない温厚なその人物は、まだ搭乗訓練には入っていない時期であったと思われるのに、樋口はその能力、性格を的確に見透していた。

私は樋口の言葉に衝撃を受けた。私たち搭乗員はそれぞれが自分の技術を磨きたい一心ばかりで、毎日の研究会はあったが周囲の技量向上を指導するための、お互いの接触、観察は二次的であった。

「俺が、俺が」といった心理状態であったことは否めない。

しかるに彼は、自分自身の腕を上げるばかりでなく、先頭に立って回天隊全般の戦力向上のために心血をそそいでいた。その有様を、彼の詳細な評言から十分に察知することが出来た。

ただただ圧倒される思いであった。あとの人間については尋ねる気が失せて、会話を打ち切ってしまった。

## 樋口 孝大尉を懐う

渡辺 要(浦和市在住、故人)

人間魚雷「回天」の創始者、黒木博司少佐とともに、徳山湾内で回天操縦訓練中に殉職した樋口孝大尉(海兵70期、のちに少佐)の思い出は尽きない。

樋口大尉(当中尉)と初めに出会ったのは昭和19年1月頃、海軍横須賀防備隊の魚雷艇隊である。私は兵科二期予備学生の同期二九名とともに海軍水雷学校で魚雷艇長講習を終了して横須賀防備隊に配属されたが、ここに来た同期の九名がそれぞれ魚雷艇を貰い、毎日訓練をしているのに対し、なぜか私だけが除外された。どうしようもない、ぶらぶらの毎日であった。

ところが或る晩のこと、樋口中尉から「相談したいことがあるので、おれの部屋に来てほしい」との連絡を受けた。私は兵学校出が嫌いなので、そういう態度をとらえての修正であろうと覚悟をして出掛けたが、会ってみると、いつもの、おっとりとした樋口中尉が、ニコニコと待っていた。

「渡辺少尉、実は俺はある特殊任務につくことになったので、甲型艇長は貴様に譲ることにした。ぜひ引き受けてほしい」

「えーっ、甲型をですが」。私は思わず甲高い声を出し、樋口中尉にじり寄り。樋口中尉が艦装委員長として横浜で建造中の甲型魚雷艇は、帝国海軍最初の大型艇で魚雷艇乗りの垂涎のマトとなっていたものである。同期の連中が乗り回している乙型は全長18メートル、21×23トン、乗員七〜八名、魚雷二本、25ミリ機銃一、九二〇馬力一に對して、甲型はその数倍の威容を誇る。水中聴音機も装備している。

私は樋口中尉の案内で、鶴見線鶴見小野にある横浜ヨット工場の80トン魚雷艇「六〇三号艇」を見た。四機四軸、29ノット、全長32・42メートル、魚雷四、爆雷一二、25ミリ単装機銃三、乗員一八名というものだった。

「渡辺少尉、艇もいいが、乗組員も粒選りの精鋭だ。ひとつ、おおいに頑張ってくれ」樋口中尉はぼんと私の肩をたたいた。「きつと、やります」と応えて、不覚にも涙が出たことを覚えていた。

樋口中尉が横防を去って間もなく、私は「六〇三号艇」を操艦して横須賀の逸見波止場に回航した。後輩の三期魚雷艇長の数人がこれを見て、「うへーっ 駆逐艦そっくり」と嘆声を発したというのをあとで聞いた。乙型を見慣れた目から見ると、甲型はすば抜けて大



大きく見える。万人注目 of 逸見の波止場に、どんぴしゃりと正確に横付けたこと、これによって乗組員の信頼を克ち得たことなどが樋口中尉とともに思い出されるのである。

樋口中尉が回天操縦訓練中に殉職したことは長崎県川棚臨時魚雷訓練所で知った。起居をともにしたのはわずか横防の三カ月に過ぎないが、口数の少ない、おっとりとして笑う八重歯が見える温厚な人だった。黙々と責務を全うするという人柄は佐久間艇長にそっくり。最後までまったく同様であった。

注一・故・樋口中尉は昭和19年春、水陸両用戦車「特四式内火艇」による奇襲隊の艇長となったが作戦中止となり、そのころ開発された回天の搭乗員に転じた。訓練開始二日目の19年9月6日、徳山湾内で回天操縦中に海底に突入、同乗の黒木博司大尉とともに最初の殉職者となった。

注二・渡辺要氏は兵科二期予備学生出身、海軍大尉。戦後逝去。

注三・右は昭和56年頃、某雑誌に掲載されたもの(この雑誌名は目下不明)後に月刊誌「オールネイビー」にも転載された。

注四・この「オールネイビー」の編集



大津島魚雷発射場の回天1型

者野崎慶三氏は、横須賀の逸見棧橋に横付けする甲型魚雷艇を見て「駆逐艦そっくり」と嘆声を発した兵科三期予備士官の一人であると言う。  
(同氏は後に、八丈島に進出した第一六震洋隊の搭乗員となった)

### 8月15日靖国神社慰霊祭余話

## 真の宗教人

英霊にこたえる会主催の全国戦没者慰霊大祭は、今年で第24回となるが、ここ15年、毎回千葉県茂原市にあるマリアの里カトリック日曜学校は生徒の作った千羽鶴を奉納している。その心の籠った千羽鶴は拝殿に飾られ、添えられた手紙は朗読披露される。その文面はいつも参列者の胸に響くものがあり、今年の手紙の要点を左に掲げる。

(全日空機ハイジャック事件のことを述べた後) “かつて操縦機をにぎり、たった一人で日本国民一億の命を背負って、敵艦に突込んで行った若き少年達！ 一体格差は何だろうと考えていたとき、いみじくも同じチャンネルで、日教組の日の丸反対、君が代反対のニュースが報じられていました。”

(中略) “  
更にあるキリスト教団体の、日の丸君が代反対の様子が報じられていました。キリスト教徒である前に、人間であり、神の摂理によって日本の国に生まれたのです。ならば日の丸、君が代を愛することは、国民として当然のことではないでしょうか。  
靖国に眠る英霊は、日章旗を体に巻き、日本人として誇りを持って、家族を想い恋人を想い、国のために己が生命を捧げて逝かれたのです。  
終戦記念日を迎えるにあたり、反対と叫ぶ前に、せめてこの日くらいは、国民ひとりひとりが英霊に感謝の気持ちをもって、日の丸を仰ぎたいものです。  
法律によって強制されるのではなく、かつてのように人を愛し国を愛する心を持った日本人になったとき、英霊よ安らかにと祈ることができるのではないのでしょうか。  
平成十一年八月十五日



奉献 千葉県茂原市  
マリアの里日曜学校生徒一同

マリアの里カトリック日曜学校  
代表 塩崎深雪

この日曜学校でどのような指導がなされているのか、これを読めばわかる。



その中に特攻の戦例は沢山ある

## 高千穂降下部隊のレイテ作戦

田中賢一

### レイテ空挺作戦の概要

#### 決戦場へ動員

日向路に秋の収穫も終り、村々に秋祭りの太鼓の音が響く頃、昭和19年10月24日、まず挺進第3聯隊に動員が下令された。動員計画に基づく第2挺進団の動員である。つづいて挺進第4聯隊、第2挺進団司令部、挺進飛行第1戦隊と日を追って動員が下令された。当時、これらの部隊は陸軍挺進練習部に所属しており、動員下令とともに練習部で編成する挺進団司令部のもとに編合されるのである。

第3、第4の両聯隊は一昨年創設されたもので満二年間、練度は最高に達していた。当時、落下傘部隊の中隊長以下は全軍から志願者を募って選抜した将校、下士官兵をもって充足していた。数日前に驕敵レイテ島上陸と聞き、乃公出でづんばの意気に燃えていた。

挺進聯隊は宮崎県川南村の唐瀬原に在り、飛行戦隊は十数キロ離れた新田原にいた。第一陣の3聯隊は、翌25日

には屯営を発ち佐世保に向かった。疾きこと風の如しである。

佐世保で空母・隼鷹に搭乗し30日出港、

一路南下した。後から動員した、4聯隊は輸送船・赤城山丸で11月3日、門司港を出た。ここで各部隊の通称名と部隊長名を掲げれば、

第2挺進団 高千穂 団長徳永賢治大佐  
挺進第3聯隊 香取 白井恒春少佐  
挺進第4聯隊 鹿島 斉田治作少佐  
挺進飛行第1戦隊 霧島 新原季人中佐  
後から次の部隊が増加された。  
挺進飛行第2戦隊第1中隊 三浦浩大尉

司令部は空路マニラに前進し南方軍の隷下に入り、11月11日、徳永団長は第3聯隊を掌握し、クラーク飛行場群内のアンフェレス飛行場に集結した。飛行戦隊は台湾の嘉義まで前進し、しばらく待機することになった。

#### 和号作戦

レイテ島に敵が上陸したのは10月20日、司令部がルソン島に到着した頃には、レイテ島の防衛を担当していた第16師団は壊滅状態となり、脊梁山脈以東の平野部は完全に占領されていた。

第14方面軍がマニラから送り込んだ第1師団は、カリガラ方向から西進する敵をリモン峠で辛うじて阻止していた。

方面軍が第二段として送り込んだ第26師団は、11月10日、人員だけではどうやら上陸したものの、上陸時の激しい空襲により、輸送船が全部沈められ、重装備一切を失ってしまった。

その頃、すでに敵は六個師団も上陸しているのに、方面軍では敵情を軽視し何とか頼勢を挽回しようと、和号作戦の計画を立て、23日に発令した。

和号作戦とはブラウエン飛行場群を奪回し、東部平野に攻勢に出る足がかりを掴もうとするものである。方面軍では現地の第35軍に命じて、第26師団を直路山越をしてブラウエンに突入させようとした。第2挺進団はそれまで南方軍直轄だったが、22日、第4航空軍(以下、4航空と略称)の指揮下に入れられた。そして4航空では方面軍の和号作戦に呼応して、挺進団をブラウエンに降下させることにし、この作戦をテ号と名づけ準備を進めた。

#### テ号作戦

この作戦計画を述べる前に挺進団各隊の編制を説明しておかなければならない。挺進聯隊は三個の歩兵中隊と作

業中隊および重火器中隊より成り、総人員は約八〇〇名である。挺進飛行戦隊は三個の飛行中隊と飛行場中隊より成り、中隊は百式輸送機(通称MC)九機が定数だが、このときは物量投下の重爆も持っていた。MCは落下傘兵一三名を乗せたので、輸送機一個中隊で縮小編成の一個中隊を運ぶことができた。

さて、挺進団ではテ号作戦の計画を示されたとき、まだ第4聯隊が到着していないので第3聯隊だけを使い、二回の空輸でブラウエンの三つの飛行場を奪取しようとした。ところが12月1日、第4聯隊が北サンフェルナンドに上陸し、真っ先にアンフェレスに駆けつけた斉田聯隊長は第4聯隊も一部でよいから第一次降下に加えてくれと強く要請した。

またその頃、レイテ島に進出している敵航空が猛威を振り、我が輸送船がつきつぎと撃沈されると聞き、ブラウエンの三飛行場以外にレイテ湾沿いのタクロバンおよびドラッグの二飛行場にも、一部兵力を降下させるべきであるという意見が、両聯隊から出された。

これらの二飛行場は和号作戦の目標になっていないので、地上進攻部隊と提携できる見込のない特攻作戦である。

目 標		部 隊 別	指 揮 官	配 当 機 数	降 着 別
ブラウエン北	第三聯隊	白井少佐	輸送機一七	降 下	
ブラウエン南	第三聯隊	桂 大 尉	輸送機六	降 下	
サンパブロ	第四聯隊	穂田大尉	輸送機三	降 下	
ド ラ ッ グ	第三聯隊	竹本中尉	重 爆 二	着 陸	
	第四聯隊	宮田中尉	輸送機七	降 下	
タクロバン	第四聯隊	榊原大尉	輸送機二	降 下	
	第三聯隊	司令部 佐藤中尉	重 爆 二	着 陸	

作戦経過を述べる前に、一言標題の空挺特攻作戦ということに触れておかねばならない。地上軍の立てた和号作戦に組み込まれているブラウエン地区三つの飛行場に向かう部隊は、決死の

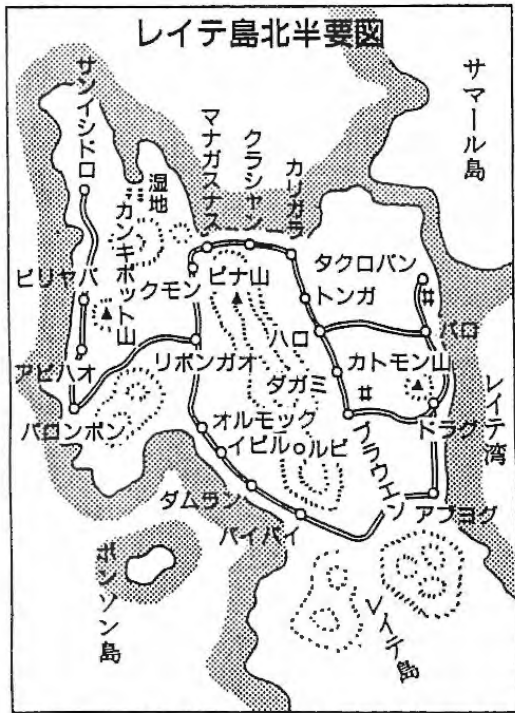
**決 行**

折しも嘉義まで来ていた挺進飛行第一戦隊に第2戦隊の三浦中隊が加わり、輸送機四個中隊となったという報告を受けた。そこで徳永団長は、4航軍に申し出て二目標を追加してもらい、最終的に左表のような部署になった。

この表でドラッグとタクロバンに向かう飛行機に重爆各二機がある。これは4航軍が第5飛行団に差出させ、強行着陸用に加えたものである。両飛行場に向かう輸送機の七機と二機が三浦中隊で、それ以外の二六機が新原戦隊のものである。

さて、12月6日15時40分頃、輸送機群はアンフェレスを離陸し、戦闘機擁護のもとにレイテに向かった。

まずブラウエン地区から説明しよう。夕暮迫る頃、猛烈な対空砲火を冒して降下した。実は降下後の行動が割に詳しく伝わっているのは、白井聯隊長が掌握した一群だけで



ある。これは後に陣没してしまうが、聯隊長の手記が現存しているからである。

ブラウエン北飛行場に降下したのは聯隊本部、第一中隊および作業中隊であり、たちまち敵を壊乱に陥れ、飛行機や燃料を焼き払った。後半夜ここ以後続部隊が降下することになっていたので、誘導のため一晚中火を焚いて待たが飛来しない。飛行距離を短縮するため輸送機はリパに戻り、そこに待機している第二次降下部隊を乗せることになっていたが、戻って来た輸送機は一七機、しかも無底のものはわずか四機という有様だった。

以下はその四機でレイテ島に向かった。ところがレイテ島の西側は折しも雨が激しく、脊梁山脈が越せずに引き返した。応急修理した何機かがさらに続いたが、同様に引き返した。

一方、山越えをして翌7日にはブラウエンに突入することになっていた26師団であるが、方面軍の参謀が図上で考えたような生やさしい機動ではない。標高一〇〇〇メートル近い連山の間を切り開いて進まなければならぬ。挺進団では初めこの計画を聞かされたとき、師団というからには諸兵連合の堂々たる部隊だろうと思っていた。ところが実体は師団長の指揮する歩兵四個大隊に過ぎない。そのような小部隊でもこの山越えは容易なことではなかった。先遣の重松大隊は山に入ってから二〇日近くになるが、まだブラウエンに到着しない。

降下部隊と提携を命ぜられている部隊はもう一つある。それは初めからこの島の防衛を担当していた第16師団である。師団は平野部の守りを失ったが、師団長以下約三〇〇〇名





軍では、いとも簡単に許可しあのよう  
な攻撃計画となった。このことは挺進  
団司令部各員の弘中郁夫少佐（47期故  
人）が戦後私に語ったところに依るも  
のが多い。

②挺進第4聯隊に榊原達哉という将校  
がいた。この件については会報25号  
（H7年11月）と26号で既に述べたが、  
標題を変えたので重ねて述べてみる。  
55期で第2中隊の小隊長だったが、11  
月に大尉になったので、聯隊長は本部  
付とした。私は動員下令の直前まで挺  
進練習部の下士官候補隊長をしており、  
五人の区隊長は各聯隊から派遣されて  
いた。その中に榊原中尉がいたので、  
その人柄はよく知っている。直情径行  
実行力に富む熱血漢だった。前年の6  
月彼が計画した演習で、高鍋町の北を



榊原が建てた碑、堤防の改修で移動した  
が現存している

流れる小丸川を渡渉する場面があった。  
勿論事前に自ら渡渉してみたのである  
が、その日は前夜山間部に降った大雨  
で増水し、何名か押流され八名溺死す  
るといふ大事故となった。

遺体収容が一段落したとき、彼は軍  
刀で割腹しようとしたが、聯隊長特命  
で監視していた下士官に取り押えられ  
て果さず、聯隊長から「戦場で死ぬべ  
き機会はずる来ると諭され思い止ま  
た。その後榊原は小丸川堤防上に私費  
で慰霊碑を建てようとし、これを知っ  
た聯隊の将校が応援し、殉職した伊藤  
大尉以下の名を刻んだ立派な碑ができ  
た。往事を知る者は今でも榊原中尉が  
建てた碑と呼んでいる。

さて、前述のようにタクロバンにも  
一部を降下させることが決定するや、  
榊原は真先にその指揮官を志願した。  
聯隊長も同僚の将校達も、榊原が行く  
ことは当然のように受けとめた。彼は  
小丸川殉職の八名の位牌を抱いて輸送  
機に乗り込んだという。

徳永挺進団長は、友軍と提携の見込  
みのないレイテ湾沿いの二目標を、降  
下の目標とすることには、最後までた  
めらいがあったのだろう。ドラッグに  
向う宮田中隊長には、敵飛行場を急襲  
したらブラウエンまで来いと言った。  
タクロバン攻撃の強行着陸隊の指揮官

殉職者の位牌を抱いて輸送機に乗りこむ  
榊原大尉



タクロバン攻撃佐藤小隊、恩賜の酒をそ  
そぐ

に司令部の佐藤中尉を出したのも、自  
らはアンフェレスの基地に在って指揮  
することの穴埋めのような気があっ  
たと推察する。司令部では部員の稲本  
少佐を、レイテの35軍司令部に派遣し  
てはいたが、タクロバン急襲隊の方は  
敵の真只中であって、とても敵を切  
り抜けて友軍のいる処まで来ることは  
不可能と、初めから思っていた。過早  
な玉砕を戒めた団長に対し、榊原は刀  
の目釘の続く限り切りまくると答えた  
という。私は右肩を少し上げて昂然と  
答える彼の面魂が目には浮ぶ。

③N曹長の述懐 パレンバン作戦のと  
きもそうだったが、各中隊は輸送機を  
割当てられると、誰を第一次降下部隊  
に入れるか、というよりも誰を残すか  
を決めるのに一騒動する。中隊長のも  
とに膝詰談判に来る者がいたり、中に  
は血書まで持ってくる。挺進第3聯隊  
第2中隊のN曹長は次廻しだと言われ  
た。第二次降下部隊は第3中隊と重火  
器中隊だと聞いているし、第4聯隊も早  
く降下させると騒いでいるので、いつ  
連れていってもらえるのか、見込みは  
ない。そこへ特攻隊募集という話が伝  
わってきた。以下戦後本人が私に語っ  
たことである。

——クラーク地区に来て航空特攻の  
ことを知り、我々もひけを取ってはな

らぬ、どうせ死ぬなら特攻隊でと思い、どこへ降下するのも聞かず真先に志願しました。

その後で、タクロバン飛行場に強行着陸し、飛行機の爆破が任務であると聞かされました。出発前、団長の訓示で、絶対に死ぬな、どんなことがあっても生き永らえよと言われたのが、今でも耳に残っています。

強行着陸機は二機で、私は先頭の一機に乗り込みました。落下傘はつけず、救命胴衣だけで、武器は手榴弾と拳銃を持ちました。

何分ぐらい飛んだか分かりませんが、外は見えませんが、天蓋から上空を見ると、敵の対空砲火は物凄く、まるで打揚げ花火のようでした。何も恐ろしいという気は湧いてこずに、案外飛行機はあたらないものだなあと、他人事のように思っていました。そのうちにガンガンと何発か貫通したようでした。天蓋からは友軍機は一機も見えず、敵の曳光弾だけでした。

しばらくして、ドスンと海面へ不時着のような恰好で落ちました。操縦者の指示で、天蓋を開け全員無事に海面に泳ぎ出しました。あたりは薄暗く、陸地はどの方向かわかりませんでした。

飛行機は海面にそのまま浮いていますが、数分後に横向きになり沈んでゆ

きました。誰の声かわかりませんが、飛行機にまき込まれるから離れるとどなられ、懸命に泳ぎました。

既に真つ暗になり、一かたまりの戦友のほか何も見えず、救命胴衣のお蔭で浮いているのは楽でした。あたりは全く静かで、どこが戦場なのか見当もつきません。

よく泳げる者は、勝手に泳いでゆき最後は四人になってしまいました。闇をすかしてみると、遠くに山があるように見え、大きな船がいるような気もしましたが、流されていることは確かでした。

そのうちだんだん夜が明けてきて、かすかに見えるようになり、びっくりしました。四方八方敵の軍艦ばかりです。はっきり見えるようになると、何隻か覚えていませんが、上陸用舟艇らしいものが、自分達を目がけて進んできました。

舟の上から自動小銃で射たれ、もはやこれまでと観念したときは、不思議に静かな気持でした。瞑目していると、真近に迫ってきて何か大声で呼びかけられますが、何を言っているのかわかりません。そのうち一人の戦友と共に舟の上に引き揚げられました。

二人で、天皇陛下バンザイと叫び、射て、射てと胸をつき出しましたが、

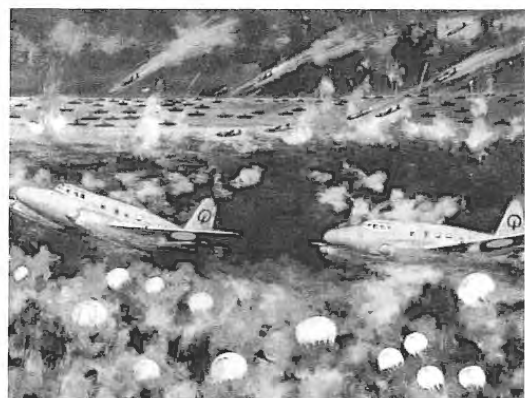
相手にしてくれません。やがて大きな軍艦に連れて行かれ、宮倉に入れられました。全部個室で外部の様子は全くわからず、何日入れられていたか覚えておりません。

そのうち宮倉から出され連れて行かれたところが、タクロバンの捕虜収容所でした。私は落下傘部隊ということをも、最後まで言いませんでしたが、二世の通訳にそれとなく尋ねると、三人ばかり豪州へ送られたということでした。またあのとき力任せに泳いで行った者は、終戦後収容された者の中にも姿が見えませんでした――

N曹長の話は以上の通りで、昭和52年に挺進3、4聯隊の縁故者で比島方面慰霊巡拝団を組織し、私もそれに加わりレイテにも行った。そのとき前記のN曹長と知り合いになったのだが、彼はブラウエンにある慰霊碑の前で膝まづいて、中隊長殿と言って泣いた。第2中隊長桂善彦大尉はこの辺に降下した筈だが、その後の消息は全く判らない。

私も申訳ないような気持でこの慰霊行に加った。というのは、動員が下令されたとき私は挺進練習部付で下士官候補者隊長をしていた。下士官候補者は直に解散し、聯隊から来ていた区隊長と助教及び下士候でレイテ作戦に参加した者は、全部戦死してしまつた。

手前はブラウエン降下、遠方は強行着陸機とレイテ湾の敵艦 松本武仁画伯



ブラウエンの慰霊碑とその前に膝まづく N氏

私は第2挺進団司令部の部員に内定していたので、直に佐世保に行き第3聯隊を空母隼鷹に乗せて送り出す仕事をしました。三日四日経って唐瀬原の基地に

年だった。乱暴者が多い挺進部隊の青年将校の中にあつて、この人は物静かで温厚な人柄とお見受けしている。

三浦中隊は遅れて動員され、台湾の嘉義で第1戦隊に追及した。三浦中隊

は完結して、挺進団長は練習部の高級部付の徳永大佐で、私に内定していた部員(部内では甲部員と呼び、高級部員の下で作戦担当)は稲本少佐と

に与えられた任務は、レイテ湾岸沿いの二目標の攻撃(当時挺進飛行隊では目標に降下させることを攻撃と呼んだ)であった。アンフェレスに来て得た情報

と示された飛行計画を知って、この経路を低高度で飛行するのは不可能であると判断したのである。これらのこ

とでは会報36号に畠山卓次氏が投稿している通り、出発日の朝になって4航空の参謀に申出て輸送機九機はドラッグ

に外された。稲本少佐は51期で私より一年上、何事にも積極的な人だった。

と変更してもらった。そして高級参謀が来て特攻隊の命名式をやり恩賜の酒を頂いたと、レイテ湾に撃墜され捕え

いた。レイテの35軍司令部に連絡に行った。オルモック攻防の後ファトンで軍

に頂いたと、レイテ湾に撃墜され捕えられた三浦中隊の滝口軍曹は証言している。しかし、このことは挺進団司令部では承知していない。三浦中隊が一

機を指揮して戦い戦死してしまつた。

部員も戻って来ないのでに衝撃を受けたと、機も戻って来ないのでに衝撃を受けたと、部員の弘中少佐は戦後述懐している。

④三浦浩大尉は挺進飛行第2戦隊の中隊長だった。挺進部隊に来たのは19

初めから強行着陸を命ぜられていた飛行74戦隊と95戦隊の搭乗員合計10名は、特攻隊として記録されているが、

対山荘という御用商人が経営する将校クラブがあり、そこで何回か杯を交わ

三浦中隊の全員及びこれらの輸送機や重爆に乗った挺進隊員は特攻隊員として扱われていない。

したことがある。私より一年後輩の53

期、宮城の産で色白く、眉目秀麗の青

## 神風特別攻撃隊第十九金剛隊

### 福山正通少佐の出撃(続)

#### 飯野 伴 七

機ほどになった時隊長は悲鳴をあげた。高木分隊長に言った。

台湾台南空に進出、出撃前の訓練比島出撃前にマフラーに遺詠

#### 遺詠

昭和19年12月中旬には台南へ進出している。岩国を何日に発ち途中何回か基地に立寄っているだろうが行動日時不詳である。

台南は比島進出の最南端近距離基地として、内地より人員機材、補充用飛行機が多数集結し、敵空襲の合間の寸暇を訓練飛行に当てていた。その頃比島セブ基地の銀河隊八〇四飛行隊は、零戦隊や他隊とレイテ沖の戦斗に従事していたが、12月に入ると飛行機も搭乗員も消耗してきた。残存兵力が二十



9期のこと。すまんが飛行機と搭乗員をすっかりつかまへて来てくれ』高木分隊長が12月20日台南空に来て見ると、ナルホド零戦、彗星、月光等

新品が大量に届いている。搭乗員も自機輸送の者輸送機便乗の者と多数到着している。零戦搭乗員の飛行時間はいづれも一〇〇時間か一五〇時間程で、とても直ぐ実戦には使えない。急降下をやらして見たが、突っ込み角度が浅く二、〇〇〇米ぐらい迄降下してくると二〇度ほどになってしまふ。速度がつくと操縦桿を押へ切れないから機首が上ってくるのだ。

「もっと深く四〇度ぐらいで突っ込みと駄目だ。戦斗機でやるより艦爆で後席から指示して角度を覚え込ませんとモノにならんぞ」思はず口走ると、隣りに一航艦先任参謀の猪口力平大佐(海兵52期)がいた。

「キミなかなか見えてるな。キミのところの搭乗員と今日やって来た零戦の連中突っ込み角度を覚えさせてくれんかね。僕が八〇四空へ連絡して一〇日間キミを借り受ける。どうかね」



先任参謀のお声がかりでは断はれない。セブへ帰るのを延ばして、九九艦爆の後席から「もっと突っ込むんだ」と指導に当たった。

高木大尉が月光を馳ってセブに帰る日が二〇一空、金剛隊の金谷眞一大尉(海兵71期)、福山正通中尉(海兵72期)以下五六名の戦斗機乗りが比島マバラカットへ転進する日である。12月31日高木大尉の操縦する月光に誘導されて戦斗機隊の第一陣二〇機がバシー海峡を渡った。

マバラカットに着けば直ちに攻撃となる。再び還ることなき身ながら、彼の顔には何の曇りもないばかりか輝いている様にさへ見える。「頼母しい奴等だ」と感嘆する反面、若い命がまた消え行くのかと思うと、たまらない悲壮感が湧いて来る。

「会ったばかりだがお別れだな」高木大尉は首に巻いたマフラーを外して言った。「俺が先か貴様らが先かどっちにしてもお互いそう遠い先のもあるまい。俺のマフラーに貴様等何か一筆づつ書け。これを首に巻いて貴様らと一緒にだと思つて俺も心強い」  
金谷大尉の「空」の一字から始つて一五名の士官が一筆づつ遺文遺詠を絹のマフラーの白地に墨痕を遺した。

福山正通少佐の遺詠

国のため盡す命を惜しまねど

唯気にかかる国のゆくすえ

山あり雲あり命を惜しむべし  
唯氣にひつこく國をゆくすえ  
昭和九年十一月一日  
海軍中尉 福山正通

高木大尉はマフラーを首に巻いてセブに帰投、過酷な戦斗を続け内地に転勤終戦により復員、マフラーは大事に持ち帰られ、奈良県吉野で薬局を経営されている。そしてこの貴重な遺品となつたマフラーは、平成元年靖国神社遊就館に謹んで奉獻されたのである。

マフラーに一筆づつ記した一五名は、  
郵井弘中尉(予学13期生存)の他一四名がリンガエン湾口に突入散つて行った。そして純白のマフラーだけが高木大尉の手許に残つた。

金剛隊で特攻戦死を遂げた一三九名の中の士官は六五名を数へる。この中予備学生出身士官は五九名で12期出身の一名を除く五八名が13期出身である。マフラーに遺文を寄せた一五名の士官も兵学校出身の二名を除く一三名が予学13期出身であつた。  
一五名の人々の名前と遺文は次の通りである。  
神風特別攻撃隊第一八金剛隊

(20・1・5 出撃)

大尉 金谷眞一 (海兵71期)	村上 "	「必中・必殺」
中尉 長井正二郎 (予学13期)	高島 "	「唯祖国の栄光を祈りつつ」
" 井上 啓 (予学13期)	小林(武) "	「死生一如」
神風特別攻撃隊第一九金剛隊 (20・1・6 出撃)	小林(秀) "	「大死一番」
中尉 福山正通 (海兵72期)	郵井 "	「天皇陛下万才」
中尉 山下省治 (予学13期)	長井 "	「新高の御山仰ぎて立つ我にまだ来ぬ秋やすでにいぬらん」
" 永富雅夫 ( " )	富沢 "	「北の熊今日ぞ忠死の撲り込み」
" 磯部 豊 ( " )	井野 "	「嵐吹く秋ぞ散り行く若桜、春来る日の御代を思ひて」
" 富沢幸光 ( " )		
神風特別攻撃隊第二二金剛隊 (20・1・6 出撃)		
中尉 廣田豊吉 (予学13期)		
神風特別攻撃隊第二五金剛隊 (20・1・9 出撃)		
中尉 村上 惇 (予学13期)		
神風特別攻撃隊第三〇金剛隊 (20・1・6 出撃)		
中尉 高島 清 (予学13期)		
" 井野精蔵 (予学13期)		
" 小林武雄 ( " )		
" 小林秀雄 ( " )		
" 郵井 弘 ( " )		
遺文遺詠		
井上中尉 「玉碎」		
山下 " 「必中」		
永富 " 「轟沈」		
磯部 " 「唯死」		
広田 " 「不惜身命」		
金谷大尉 「空」		

心中  
海軍中尉 福山正通  
風吹く秋ぞ散り行く若桜  
春来る日の御代を思ひて  
海軍中尉 井野精蔵

遺文遺詠からは自らを省みず、自らの死によって祖国の安泰を願う魂の叫びが聴えて来る。  
金谷大尉 「空」  
考へる事は一つも無い。すべてを空にして俺は行く、禪の境地に達した隊長としての心境か。

### 第一御楯隊・彩雲一〇二会

#### 合同慰霊祭

飯野伴七

#### 映画上映会(二本立)のご案内

借行生涯学習塾

中江 仁 陸士61期

今年の第一御楯隊慰霊祭は、11月27日突入の日より早めて彩雲会と合同で9月9日靖国神社で行われた。

一〇二空彩雲隊は第一御楯隊をサイパン迄誘導し、攻撃後戦果確認偵察した飛行隊で一機三人乗組で隊員が多い。

第一御楯隊関係は大村隊長遺族三名

参列者五名の八名、彩雲会は三四名が参列した。一一三〇参集所集合、一二〇〇昇殿修祓を受け本殿へ進み慰霊の儀に入った。神饌奉獻、神官祝詞奏上の後、第一御楯隊大村隊長の兄行男氏、彩雲会三名、飯野の五名が代表として玉串奏奠二拍手拝礼した。退下後記念撮影、有志二九名はバスにて湯ヶ原に出で夜の懇親会場に向った。残留者一名は靖国会館で昼食の後解散した。

○大東亜戦争と国際裁判

(昭和34年新東宝製作 一般公開)

○天翔る青春―日本を愛した勇士たち(平成9年日本会議制作)

(1)日時 平成11年12月10日金曜日

開場 11時 入替ナシ

上映 12時・15時・18時 3回

(2)場所 アミューゼ柏(旧柏公民館)

クリスタルホール定員400名

Tel 0471(64)4552

JR柏駅東口から徒歩6分

(3)入場料 無料

(4)主催 借行生涯学習塾

常磐陸士第61期生会

(5)上映協力 日本会議

(6)協賛 平和の会(柏市)、英霊に

こたえる会、(財)特攻隊戦没者慰

霊平和祈念協会、靖国彩管奉仕

会、房総・東葛・松飛・習志野

原・市川・千葉大学・千葉支部・

印東・木更津の各借行会

(7)後援 柏市教育委員会

産経新聞社

(8)問合せ先

中江宛Tel 0471(61)2156

私は偏らない史実の伝承こそが、英霊に対する鎮魂顕彰であると考えております。そこで、一般大衆特に若い人達に歴史の多面性と偏らない日本の近現代史学習のきっかけとなればの願いを込めて左記二回の展示会を昭和史の証言と題して柏市民ギャラリーにて開催しました。

(1)「二・二六事件遺品展」

9、2、15、18

(2)「特攻散華」特別攻撃隊資料展

10、2、28、3、3

千葉県北西部の柏市という人口33万人の地方都市での僅か4日間ではありましたが、老若青少の男女が二回共二千名を越え延べ五千名に近い入場者を記録し、読売、産経新聞や雑誌にも取り上げられ、感想文特に青少年のものを読むとそれなりの成果を挙げたものと考えております。

今回第3弾として表題の映画上映会を企画しました。

「大東亜戦争と国際裁判」の前編は戦争の大局的推移、後編は極東軍事裁判

(東京裁判)法廷の状況であります。

日本とアメリカが戦ったことを知らない若者にもそれなりの理解を得るもの

と思われるからできるだけ多くの若者

の来場を熱望しておりますので、若者への推せん勧誘に御力添え戴きます様御願ひ申し上げます。

#### 協会発行の書物

申込みあれば郵便払込用紙を添えて送ります

#### 「特攻隊遺詠集」

戦没特攻隊員の和歌等約八〇〇首を集録し、作戦及び詠者の経歴等簡潔な解説を付してある。

頒価 二、〇〇〇円

送料 三五〇円

#### 生残り特攻隊員の手記

#### 「長い日々」

元石陽隊員吉武登志夫著

著者は目標を間近かにグラマンに要撃され、重傷を負い不時着、苦難の途を辿る。

頒価 一、〇〇〇円

送料 三五〇円

#### 「愛は終りなく」

小栗かえで著

沖繩の空に散った特攻隊員に対する純情を、今も抱き続ける「聖女」の書。特攻隊員の純情さも併せ汲みとることになる。

頒価 一、五〇〇円

送料 三五〇円

#### 靖国神社創立百二十年記念

#### 「やすくにの祈り」

編集 靖国神社

発売 日本工業新聞社

定価 四、八〇〇円(税込み)

写真集 A4変形上製本 220頁

明治以降の靖国神社が一目瞭然

最寄の書店で取り寄せてくれます